

夢へと続く道
～You' s dream & choice～

You' s 出版委員会 編

1

目次

序章

はじめに 5

第一章 それぞれのあゆみ

「関わる人を HAPPY にする」
新原克弥(ジーニョ) 10

「Tomorrow is another day」
中岡 静香 22

「超未来技術の探求：アインシュタインの言葉と私の想い」
稲木 幹也 28

「一人ぼっちの子供が仲間に囲まれた一人社長に」
春 奈々未 38

「社会人40年生、振り返り今できること「社会貢献」」
柴沼 功 46

「10年後の自分と10年前の自分へ」
北見 俊輔 52

「自分と他人と次世代への思い」
小原 一将 56

「自分に素直に」
アチャコ 62

「自分らしく生きるひとを増やしたい」
菅谷 千尋 64

第二章

『ジーニー×ななみんインタビュー対談』with しずか
..... 70

終章

終わりに 96

はじめに

はじめに

あなたの人生において、「想い」とは何でしょうか？

「想い」と聞いて、最初に頭に浮かぶのは何でしょうか？
それは、夢、目標、あるいは大切な人々との絆かもしれません。あるいは、過去に抱いた後悔や悔しさ、成し遂げた達成感かもしれません。

どんな形であれ、私たちの人生において「想い」は大切な指針となり、私たちを導く力を持っています。

この本は、そんな「想い」をテーマに、一つのワークショップで出会った複数の男女が、自分自身の人生を振り返りながら、それぞれの想いを綴った自叙伝の集まりです。

このワークショップは、書くことを通じて自己を探求し、過去を振り返り、そして未来を見据えるというものでした。それぞれの参加者が、自分だけの「想い」に向き合い、それを言葉にする過程で、さまざまな感情や思い出が浮かび上がってきました。

年齢も職業も異なる彼らは、それぞれが異なるバックグラウンドを持っています。ある人は子育てに奮闘してきた主婦、ある人は職場でのキャリアに全力を注いできたビジネスマン、またある人はクリエイティブな仕事を通じて自己表現を模索してきたアーティストです。

それぞれが異なる視点から、自分の人生を語り、その中で見つけた「想い」を表現しました。

この本に収められたストーリーは、まさにその多様な「想い」の結晶で

す。文章のスタイルや文量はそれぞれ異なりますが、どの物語も、著者たちの真摯な思いが込められています。

成功と失敗、喜びと悲しみ、達成と挫折——そのすべてが、彼らの人生の一部としてこの本に刻まれています。

「想い」とは、単なる感情ではありません。それは、私たちが人生という大海原を進むための羅針盤であり、芯となるものです。

嵐の中でも、それがあからこそ進むべき方向を見失わず、どんな困難にも立ち向かうことができるのです。

また、「想い」は、私たちが未来に向けて何かを成し遂げようとするとき、その原動力ともなります。夢や目標を抱くとき、それを実現するための強い意志となり、私たちを前へと進ませてくれます。

この本を手にとってくださったあなたにとって、ここに綴られた物語の中に、何か共鳴するものがあれば、とても嬉しく思います。

著者たちが人生の中で見つけた「想い」は、決して特別なものではなく、誰もが心の中に持っているものです。

この本があなた自身の「想い」に向き合うきっかけとなり、そしてそれを大切に育んでいくためのヒントが得られれば幸いです。

最後に、この本を楽しんでいただきたいという気持ちを込めて、一言お伝えします。

どうぞ、時間をかけてゆっくりと、この物語たちに触れてみてください。
読んでいくうちに、あなた自身の人生と重なる部分が見つかるかもしれ
ません。あるいは、これまで気づかなかった新しい視点が得られる
かもしれません。

いずれにしても、この本があなたの心に小さな灯火を灯すことを願って
います。

2024 年 6 月
You 's 出版委員会

第一章 それぞれの歩み

1.

「関わる全ての人を HAPPY にする」

新原克弥(ジーニョ)

関わる全ての人を HAPPY にする！ 私のミッションは、関わる全ての人を HAPPY にすることであり、全ての人が最大限に才能発揮をして、お互いに共鳴をし、『より良い社会』の実現をしていくことです。ここでいう、『より良い社会』とは、人々が共に幸福で、持続可能で公正な社会を指します。この目標を達成するために、さまざまなアプローチがあると考えています。

- ① 持続可能な社会を実現するきっかけを身近なところから：環境問題や貧困対策などの長期的・大規模な課題に対して、身近なことから始めていくべきとの意見があります。例えば、通勤や通学で自転車を利用した距離に応じて税金を軽減するエコ優遇税、食品ロスを減らすための文化、運動で消費したカロリー分の食事を飢餓地域に送るチャリティーなどが挙げられています。
- ② 人の温かみを感じる明るい社会に変えたい：希薄化した人間関係を改善し、明るい社会を実現したいとの願いがあります。挨拶から始めることや微笑みを返すことなど、ちょっとした行動で人々の心が温かくなる社会を目指しています。
- ③ 社会におけるルールが適切に見直されてほしい：社会のルールに対する言及もあります。実情に合わせて変わるべきルールや守られるべきルールについての意見があります。電車やバスなどの公共交通機関が無料になれば、クルマを使わない人が増えるかもしれないとの提案や、レジ袋の有料化によるエコ意識の高まりなどが挙げられています。

私は、これらの仕組みを実現するために、2020年12月に、NKCS

合同会社を設立し、2021年9月には You`s 合同会社を設立しました。その後、NKCS をホールディングス化し、約 30 の子会社を設立しました。そして、あらゆるステークホルダー（関わる人々）が、社会の仕組みを話し合っていく『座談会』という仕組みを作り、年間 200～300 回の活動をしています。

NKCS ホールディングスの『座談会』は、さまざまな専門分野の人々が集まり、意見交換や情報共有を行う場です。士業、研究者、社長、産学官民の方々が一堂に会し、ビジネスや社会に関するトピックについて議論し、学び合う機会となっています。弊社の座談会には、異なるバックグラウンドを持つ人々が集まり、知識や経験を共有し、新たな視点を得ることができる場として重要です。さまざまなテーマについて意見を交換することで、より良い社会やビジネス環境構築のアイデアや戦略が生まれることを期待しています。

(NKCS 広報サイト：<https://nkcs.newsrooms.net/>)

そして、弊社座談会に参加するメンバー達は、とても仲が良く専門性も高いため、日本中の士業や研究者・経営者などにて、『何でも解決する士業・経営相談』を実現しています。

弊社座談会への参加により、経営上の悩みが解決することも多々あります。さて、そんな NKCS ホールディングスは、2000 人の士業と 1000 人の研究者による経営相談を提供しています。御社の右腕となり、事業支援を行うワンストップのビジネスサービスです。NKCS は、社長や産学官民のオープンイノベーションネットワークと連携し、御社の成長と拡大を全力でサポートします。

NKCS の特徴的なサービス

- ① 販路拡大と法律会計・技術支援: 販路拡大、マーケティング、セールス、組織開発、マネジメントなどに関する相談を受け付けています。新規事業の創造や IT 技術を活用したマーケティング、組織全体の結果を最大限に引き出すリーダーシップ方法などをサポートします。
- ② 土業・研究者コーディネート・総合経営コンサルティング: NKCS の人脈から、御社に必要な人材や社会資源を活用してサポートします。土業会や研究者会、社長会などのネットワークを通じて、御社のビジネスをサポートします。
- ③ 御社の事業パートナーとして成長・拡大をサポート: NKCS は、御社の成長と拡大をサポートするビジネスパートナーとして活動します。

NKCS は、企業等のビジネスを成功に導くために、専門家の知識とネットワークを活用しています。現在は、多様な会社・組織と連携をし、一緒に新しい社会価値を作っていく活動も増えています。関わる全ての人を HAPPY にする！ より良い社会を実現していく！ そのために、弊社座談会を通して、共に話しあい、解決を図っていきます。

●一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけた言葉やアドバイスは？

私の人生の前半は、非常に暗い人生でした。

しかし、逆境こそが人生の最大の宝物であり、世の中の希望へと変わっていきます。

このことを理解いただけるよう、次ページ以降に私が今(2024 年)から約 10 年前に書いた記事を参考として掲載します。

【「逆境の先に…」】

(スポットライト図書館オフィシャル記事 新原克弥様 2013 年 2 月 18 日、著者：新原克弥より引用)

子供の頃、僕は毎晩かなしばりにあった。

しかも、決まって同じ夢を見た。内容はこうだ。

「不思議の国のアリスに出てくるような大きな草原に一つ扉がある。何か決意をもってその扉を開く。その先はインディー・ジョーンズのアドベンチャーの世界。裸足の僕は薄暗闇の中を一生懸命に歩く。岩や人に追いかけられたり、やりが飛んできたかと思えば、ヘビがうじゃうじゃ出てきたり…うーうー！！と叫びたくなるほどの心からの恐怖の連続。最後に一つの扉にたどり着く。恐る恐るその扉を開こうとしたところで、目の前が真っ白になる。」夢は決まってそこで終わった。

夢のごとく、僕の半生は逆境の連続だった。

僕の一番古い記憶は 4 歳のこと。

父から虐待を受けていた。大手企業に勤める高卒の父はコンプレックスのかたまりで、仕事のストレスを僕にぶちまけるかのように暴力をふるった。

母と妹と誕生日祝いをしていても「黙れっ！！」と怒鳴り散らされる。ラーメンをすする音で「うるせえっ！！」と言われ、殴られたり蹴られたり…常にビクビクしていた。

母と父も不仲で、怒鳴り合う毎日。居場所のない僕の心のより所は母が買い与えてくれた「プラレール」と「レゴ」だった。朝から晩までひたすら組み立てて遊び、家の中と自分の中に閉じこもるようになっていった。

小学校では、激しいじめにあった。

自分は精一杯普通にしているつもりなのに、なぜか「汚い！」、「ばい菌！」と言われ、先生からは「この子は変だ」と差別的な扱いを受けた。クラスだけでなく、学校中から異端視された。

4年生では、投げつけられた石が頭に直撃し、流血。深い傷を負い、入院した。上級生からは裁縫針を指に刺されるなど拷問まがいのことをされた。今になっても消えない傷が体中にある。守ってくれる人がいない、生き地獄だった。

「なんで自分だけ…」と考える頭もなく、現実を受け止めることに一生懸命だった。

つらいという感情すらよくわからなくなって、処理しきれない感情がひたすら涙となって流れ出た。

家にも学校にも居場所のない逆境の日々だった。それでも、学校には通い続けた。

5年生の時、帰り際に「この、新原あー！！」と校門の前で呼びとめられた。ガキ大将が集団を引き連れてこちらに迫ってきて、取り巻きの5人に囲まれた。「うるせえなあ！！」と叫んだ後、頭が真っ白になった。気付いた時には相手をボコボコにしていた。人生で初めての暴力、何かがプツンと切れた瞬間だった。

次の日から、まわりの接し方が変わった。きれいさっぱりというわけではなかったが、いじめがなくなった。僕は「変わろう。新しい自分になろう」と決心し、服も髪型も変えた。父からの暴力も次第に無くなり、小学校での生活は落ち着いたものになっていった。

さらに新しい自分を目指し、中学校では、いわゆる「中学校デビュー」をした。会う人会う人に大きい声で「おはようございます！！」とあいさつし、積極的に友達を作った。悪気はなかったのだが、元気が良すぎて授業中に騒ぎ過ぎたのが良くなかった。

「アイツ、なめてるよな。」

不良グループに目を付けられた。体育で人のいなくなった教室で、取り囲まれてはボコボコにされた。鍵を閉められ、逃げる隙もなかった。またいじめが始まった。逆境だ。

中学2年の秋から不登校になった。「頭が痛い」と仮病を使っては、家に

引きこもり、当時流行った「ときメモ」ばかりやった。フィギュアを集めたり、ポスターを部屋中に貼ったり、オタクの世界にどっぷり浸かった。また自分の中に閉じこもった。誰が来ても部屋には入れなかった。3年の担任になった北村先生は様子を見にしょっちゅう足を運んでくれた。そんな中で、猛烈な頭痛に襲われるようになった。かき氷を食べた後のキーンとする痛みをもっとずっと激しくしたような痛みだ。病院で精密検査を受けてもどこにも悪い所はない。最後に回された精神科で、「君は普通ではない。これから先、普通の人のような生活はできないと思って下さい。」と伝えられた。そんなことは認めたくなかった。心配して来てくれていた北村先生は「お前はやればちゃんとできるはずだよ。とにかく必死で勉強しなさい。」一寸の疑いもなく、励ましてくれた。それから必死に勉強した。先生のすすめで高校受験もした。やっとの思いで県内有数の不良高校に合格することができた。先生は心から祝ってくれた。

高校に入るとまわりは不良ばかり。廊下を暴走族がバイクで走っている。みんなはナイフを持ち、先生は竹刀を持ち歩いていた。間もなく、強制的に暴走族に入れられた。合言葉は「目が合ったら殺せ」。この言葉を生きていくために必要な当たり前の言葉だと思ってしまった僕は、ナイフこそ持たなかったが、バットを持っただけで暴れた。仲間は次々、刑務所に入れられた。そして、当時流行った「エアマックス狩り」に仲間が手を出し始めた時だった。運の悪い仲間がヤクザを狩ろうとしてしまった。僕の目の前で発砲された。胸を撃たれ即死。目の前の視界がバリバリと音を立てて崩れた。

「一体、何がしたいんだ…」

自問自答した。

何か人のためになることをしなくてはいけない。

変わろうと思った。

暴走族から足を洗い、廃部寸前の福祉サークルに入った。この不良高校に福祉サークルが存在したのは奇跡だった。部員は3人。がむしゃらに

動き回った。みんなでどんな活動をしてみたいかじっくり話し合い、子ども・障害者・高齢者・国際交流の4つの分野に分かれて、施設や老人ホーム、社会福祉協議会などに働きかけボランティアを送り込んだ。初めは、やらされている感が強かった元暴走族の仲間たちも少しずつ人のためになることに喜びを感じるようになり、仲間が増えていった。気付けば部員は40名近くになっていた。関わった多くの人が喜んでくれた。地域の新聞やラジオ、全国的なメディアも取材に来て、まわりが変わり始めるのを感じた。

「自分が変わらないと何も変わらないんだ。」

改めて気付いた。小学校の時と変わらず、逆境に立ち向かった僕がそこにいた。

福祉をもっと勉強したくて、大学進学を考え始めた。しかし、高校受験以来、勉強らしい勉強なんて全くしていなかった。予備校に通い始めたが、クラスは当然一番下のクラス。僕以外は全員高校一年生だった。「先生！～ing ってなんですか？」なんて質問をする高校3年生は、笑われ、バカにされた。

ある日の授業で、塾長に言われた。

「勉強は忘れたっていい、だけどこの言葉だけは覚えてくれ。『現状否定』！これから先どんなことがあっても現状に満足せず、現実を変え続けるんだ！！」

まわりがぼかんとする中で、僕は1人涙が止まらなかった。死に物狂いで勉強し、1年の浪人を経て、福祉系大学に合格した。4年間、福祉を通して人と関わり、好きなだけ学べるのが幸せだった。

福祉の道の就職を一度は考えたものの、経験の幅を広げるため大手メーカーに就職し、営業職に就いた。コミュニケーションが下手くそで、パソコンの使い方も分からない、営業のノウハウも、ビジネスマナーもさっぱり分からない逆境だったが、今までの経験に比べて全く大きな問題では無かった。初めはズタボロだった業績もサボらず、誠実に働いた結果、全国トップのセールスを記録するまでになった。給料がどんどん上

がり天狗になった。

「俺様は仕事ができるんだ！営業のトップなんだ！」鼻高々に思っていた。金にモノを言わせて人を動かした。

でも、地位と名誉と金を手に入れたのに、さびしさしか感じなかった。大きな失敗だった。その後、会社を辞め、改めて自分を鍛え直すために勉強を始めた。色々なセミナーを受け、学びの場を探し回った。

そこで、「某大学校」という社会勉強の場に出会った。尊敬できる魅力的な先生達から改めて学校という場で学べるのが心から楽しかった。学校の授業を受けるうち、自分を変えることで逆境を乗り越えてきた経験から、多くの人に「自分が変わることで周りをよくできるんだ。」ということを読んで欲しい、みんなが人生の中で学び続けられる社会をつくりたいという思いをもつようになった。

憎いと思った過去も今はただ感謝している。自分がこうして生きているのも父と母のおかげだと思えるようになった。この思いを社会に返していくため、僕はこのある某大学校の実行委員長として仕事を始めた。幼いころ見ていたあの夢の扉を僕は今、開けようとしているのかもしれない。

【「逆境の先に…」2013年】より一部引用

以上が、今から10年前に書いた記事ですが、こういった人生の出来事が、僕の大きな逆境となり、様々な人生困難を乗り越えてきました。私は、社会に出てから、起業をしてからも、本当に様々な苦難に遭遇をしました。

例えば、起業に失敗をし、多額の借金を背負ったり・結婚詐欺に会ったり、大事な人を失う経験も多々ありました。

しかし、どんな時でも、めげずに前に進み続けてきました。

それは、幼少期の自分自身の経験が大きく、どんな時もあきらめなかったことが大きく影響をしていると思います。何度も何度も地獄を見ては、その先の光も見つけ、沢山の仲間にも恵まれました。

そして、2020 年のコロナの発生時に、社会を明るく照らす組織を作りたい！と思い、NKCS ホールディングスの設立へとつながりました。

どんなに辛くても、あきらめずに前を向いて進み続ける。

そしたら、たくさんの仲間が集まってきて、さらに大きな活動へと成長をしていく。どんな時にも前を見て歩き続ける。

そして今、自分自身に起きている現象の因果関係を考え、自問自答をしていく。全ては気付きの世界だから。

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

- ①全ては気付きの世界
- ②現状否定
- ④ 継続は力なり
- ⑤ 関わる全ての人を HAPPY にする
- ⑥ 何でも解決する士業・経営相談
- ⑦ 逆境こそが人生の最大の宝物であり、世の中の希望へと変わっていく

写真タイトル

『沢山の仲間を支えられ』

～あきらめなければ、人生は必ず好転する～



☆著者プロフィール

新原 克弥 (チャット GPT より)

新原克弥さんは、土業の総合経営コンサルティングファームを経営されている方です。

神奈川県相模原市出身で、1983年5月3日に生まれました。

学歴として、ルーテル学院大学総合人間学部社会福祉学科と国際ビジネス大学校国際ビジネスコンサルタント養成校を卒業されています。

土業のオンラインサロンや顧問サービス、営業・経営塾、社長広告などを提供されており、幅広い経験とスキルを持っています。また、社会福祉士と国際ビジネスコンサルタントの資格を所有しており、多くの人々に貢献されている方です。幅広い視野と洞察力を持っています。

世界4位のITインサイドセールスであり、国内1位のフィールドセールスを3回達成されています。

また、食品メーカーやWEBサービス、人材サービスなどの分野でもトップクラスの実績を持っています。

彼はボランティア活動にも熱心に取り組んでおり、多くの人々と関わりながら社会活動を展開しています。

新原さんの経歴は多岐にわたり、ビジネスからマネジメントまで幅広い経験を積んできました。彼の総合的なコンサルティングサービスは、中小企業の社会資源課題を解決するために活用されています。

●NKCS ホールディングスとは

2000人のNKCS土業・1000人の研究者・6万人の社長・5万人の事業主・1000社の連携企業が、御社を全力で支援します。

人生にビジネスパートナーをつけましょう！

法律・経営のNKCS

医療福祉のNoah

教育のYou`s という

3つのグループ法人を持ち、元IT系世界4位のインサイドセールスである新原ジーニョと仲間達が、

・販路拡大・土業・研究開発・新規事業・人財採用教育・SDGS・産学官民連携・IT業務効率化・海外展開・M&A,IPO・PMI等の総合支援
・総合顧問 等を通して、関わる全ての人をHAPPYにします。

本来の御社&あなたらしい生き方・ミッションを実現しましょう！

「御社の事業パートナーとして、御社の成長・拡大をサポートします」

NKCS 合同会社(NKCS ホールディングス)

<https://nk-cs.com/>

【関連会社】

①You`s 合同会社

<https://yous-labo.com/>

②You`s 社会保険労務士事務所

<https://yous-sr.com/>

③You`s 社会福祉士事務所

<https://yous-sw.nk-cs.com/>

【広報サイト】

<https://nkcs.newsrooms.net/>

2.

「Tomorrow is another day」

中岡 静香

私は今、様々な仕事をしている。一つは社会保険労務士という仕事。一つは法人の経営者。そしてアルバイトで障害者支援施設や児童養護施設で働いたり、地域の子供たちと触れ合うボランティア活動をしたり、福祉を学ぶために通信制の大学にも通っている。

よくこの話をすると、「凄く忙しいのでは…」と言われてたりするが大してそんなことはなく、意外と時間に余裕はある。毎日することに変化はあり、今後のこと・経営や自分自身のことなどを考えたりして日々研鑽に励んでいる。だけど私が今のように充実感を持って「自分の人生を生きよう」と思いだしたのは、実は本当につい最近のことだ。

いつも危なっかしく世の「普通の人生」からは少しはみ出て、人間関係や生活でも悩んだり、浮き沈みが激しくジェットコースターのような人生を生きてきたと30代半ばして今までを振り返って思う。

私は30歳頃に社労士事務所を開業した。その時の貯金は恥ずかしいが残高は5万円もなく見込顧客はゼロで開業をした。社労士の登録費用（約20万円）は父に出してもらった。父に開業してみたいと話すと否定をせず「これで最後だからね。それからは頑張れ」と言ってくれた。そして2019年1月に東京で社労士事務所を開業し、今で5年目を迎えた。お客様も何社か増え法定講習の講師などもさせてもらえるようになり、何とか生き残ることが出来ている。まだまだ未熟であるが、私は開業当初のままの「自分」だと恐らくとくに食べていけず廃業していただろうと思う。

私は10代の頃約5年間実家の高知で引きこもり、浪人の末大学進学

で上京し、そのまま東京で就職した。社労士試験は5回目で受かった。受かった時は幸せだったがそれからまた葛藤の日々が始まる。なぜなら試験に受かる事を目的としていてその先の人生の目的等が何もなかったから。「こんなに頑張った私が…」という驕りと葛藤の日々が幕を開け、30歳の頃は派遣社員でビラ配りなどをして生活をしていたこともあった。

「どうせ失敗だらけの人生だからいいかー。」と、31歳頃独立開業し交流会などへも参加をした。その時に出会ったのが今一緒に会社経営をしている新原である。彼が当時ホームページの販売営業をしていて最初の顧客になったことから縁が始まるが、彼は私に「社労士だけ知っていてもだめだ。色んな世界、職業を知る事が大切。」と教えてくれた。私は営業経験が全くなく名刺交換も企業で人事をしていた時は3ヶ月に数枚程度だったが、開業して色んな人と会ううちに、世の中には沢山の職業・人・価値観・世界があることを知った。

ある時私は「人のことのプロ」と新原に言ったらとても怒られた。「人のことを本質で分かってはいない。現場を知らない。」と。新原は社会福祉士でもある。一度福祉現場にボランティアに行ってくるように言われ、私は最初少し抵抗した。だが元来負けず嫌いでもある私は社会福祉協議会に登録し介護施設にボランティアに行ってみた。楽しかったがなんだかまだわからず、2022年にご縁があって障害者支援施設でアルバイトをすることになった。そこでの仕事は主に生活支援（食事介助、排泄介助、利用者の身の回りのお世話等）である。そこでの仕事が私の今までの仕事の価値観を大きく変えた。グループホームで利用者の方のお洋服をたたんでいた時、なんだか心が凄く温かくなった。「いってらっしゃい」と生活実習所へ送り出すときに見送って皆が行くときや、お話をして他愛無いことを言ったり、少し生活支援で良い変化が見られたりすると、人の成長や変化を見ることが楽しく微笑ましいという感情が湧いた。これは私が今まで自分なりに必死に仕事をしてきた中では感じなかった感

情である。この時初めて新原の言葉が分かった。私の生きてきた世界がいかに狭く、そして「人」がどれだけ奥深い存在なのかを。それは現在児童養護施設でも働き始めて感じていることでもある。

私は民間企業等で人事や事務、法律の仕事だけをしていたらきっとこの感情に気づかなかったし、この変化が実は私自身の会社経営にも良い影響をもたらしている。自分の中で生まれた変化が人への接し方への変化にもつながるからだ。

私は思う。自分がいかに何も知らないかを知った時から、本当の意味で人生が始まるのではないだろうか。そして本当の喜びは「人」の成長を見て伴走することなのかもしれない。

だからこそ私の人生はまだ始まったばかりである。きっと半年後はまた違う気づきがあるだろう。それらを大切に生きていきたいと思う。

一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉やアドバイスは？

辛い時はいかに自分が惨めで可哀そうで、そこから逃避したくてしょうがなくて「誰か」や「何か」のせいにしていたなあと、今は思う。

人生でとても辛かった時期は大きく2つあるが、一つは高校2年生の時不登校になり単位が取れなくなり体調も崩し特別支援学校へ移り、20歳になるまで引きこもっていた時と、もう一つは大学の時に大事な存在を亡くした時である。

私は辛いことが起こると、「ああ、まただ。どうして私ばかり…」と首が絞められているようで息ができなくなる感覚に陥ることが過去何度かあった。そんな時は泣いていてもしょうがないので色んなことに逃避をした。だけど今振り返って気づいた。自分の人生で現れる人やパートナーは「鏡」であり、実は自分が思い描いたように人生は表されること

に。

私は辛かった時、「何か」や「誰か」のせいにしていた。確かに要因は他にもある。だけどそれを望んでいたのは「自分自身」だったのかもしれない。

先日とても不思議な出来事があった。高知で通っていた高校で、2年生の時の担任の先生に東京で再会をした。ある仕事場で他の方に私の苗字と呼ばれ、先生は名刺交換をする前から驚きの表情を見せ、とっさに私の名前をフルネームで呼んだ。名前を呼ばれた瞬間「え！？誰？もしかして先生…？」と、元担任に気づいた時、あまりにも信じられない感情で腰を抜かすほど驚いた。ちょうどそこに私の仕事仲間等もいてわたしたちの再会にかなり驚いていた。先生とは約20年ぶりの再会だ。先生は私が特別支援学校を卒業する際の卒業式にも来てくれた。

そう、高校2年とは不登校になった時なのだ。10代後半は私にとって暗黒の時。華ある学園生活とは無縁で制服も満足に着ず成人式にも行けなかった。そのような時と一応自活が出来て東京で暮らして色んな活動が出来ている今を比べて個人的に思うことは、「苦労や挫折をできるだけ早い時にしておいて本当に良かったね！」という言葉だ。

私はこれからも色んな困難にぶち当たるだろうと思う。だけど思うのは昔に感じた孤独や挫折感、親にかけてしまった苦労、そして諦める感情・諦められる態度など、色んな経験や気持ちを若い時に経験した。そう、これ以上はないって自分で思うぐらい。だから凄く楽（らく）なのだ。だって底にいと上がるしかないから。生きる上での術は勉強だけでは手に入らない。自分が体験して起きた出来事、そしてそれが大変苦しいことであつたら、実はそれはこれからの未来を明るくする一番の幸運の鍵になると思う。何もなく平坦な人生も悪くないだろうが落ちた時立ち上がるのが大変かもしれない。

その点、私はまだ書ききれない様々なことを少しずつ乗り越えてきた。生きる術を身に着けてきた。だからこれを読んでもくれる人に伝えたいことは、「苦労は買ってでもした方が良く、できたら出来るだけ若い時に。大丈夫、死なない限り晴れる瞬間がくる。苦労しただけもうけもん。」これを昔の私に伝えてもきっとわからなかったけど、これも人生なのだろうなと思う。

失敗の数だけ強くなれるのかもね。

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

“好きなものを思いっきり楽しむ。”

私には「推し」が何個かあります。アイドルやスポーツ選手、好きなチームなど。

それらを思いっきり推します。現役でいるうちは沢山できるだけ会いに行けるように投資するし、好きなスポーツなどは思いっきり応援します。

「推しは推せるときに推せ」と好きなアイドルが言っていました。

振り返るとその時間って本当に尊いものだと思うのです。何事も始まりがあれば終わりがあるから。

だから自分や周りの人に対してもその時その時を大切に、時間は有限だからこそ後悔のないように思いっきり楽しんで、生きていけたら良いなと思います。

写真タイトル『大好きな人たちと』

ジーニーの誕生日会で、ななみんとジーニーとカラオケ



☆著者プロフィール 中岡 静香

You 's 合同会社 代表社員／You' s 社会保険労務士事務所 代表／一般社団法人 JOCB 協会 理事

高知県生まれの”はちきん“。食べること歌うことスポーツを見ること料理することが大好き。

Linkedin

<https://www.linkedin.com/in/shizuka-nakaoka-b15a98185/>

3.

「超未来技術の探求：アインシュタインの言葉と私の想い」

稲木 幹也

最近、物理学者アインシュタインの言葉、「God does not play dice with the universe.」（神は絶対にサイコロを振らない）に出会い、大変衝撃を受けました。この言葉は、アインシュタインの信念、「宇宙の出来事や運命は単なる偶然ではなく、秩序や法則によって支配されている」という考えを表しています。

この言葉との出会いが、私の心の奥底に眠っていた「想い」を蘇らせました。それは、科学的にまだ説明できていない「超未来技術」を探求したいという想いです。そして、いつか「超未来技術」により世の中のパラダイムシフトを起こしたいという願いです。

最近、私が注目している技術には、波動・振動数・水素・宇宙エネルギーがあります。また、子供の頃から予言・予知・心霊現象・UFO・テレパシー・タイムマシン・ワープ・引き寄せの法則にも興味を持ち続けています。

私は、これら全てを説明できる法則が絶対に存在し、いずれ発見されると信じています。その法則に一步でも近づくために、「超未来技術」と呼ばれる技術の探索を始めました。

そんな私が、なぜ今、このような想いを抱くようになったのか、振り返ってみました。

小学校の頃、私は将来、科学者になり、世の中の人々に喜んでもらえる発明をしたいと考えていました。その頃から、科学・技術・宇宙の仕組み・生命の不思議に非常に興味を持っていました。そんな中、6年生の時に友人と行った共同研究「いろいろな水質と種子の発芽の関係」で大学の学長賞を受賞しました。その時は、この研究が将来、大学の卒業

論文のテーマに繋がるとは思ってもいませんでした。

中学・高校の頃、部活動や受験勉強の中で、自分が何をしたいのかという具体的な夢や想いが見つからなかったように思います。しかし、その頃流行っていた予言・心霊・UFOについては、非常に興味を持っており、その興味は今でも続いています。

大学では、小学校の頃の想いを引き継いだのか、植物環境調節工学の世界に飛び込みました。植物工場のためのバイオテクノロジー技術が卒業論文のテーマでした。この技術は、ラン細胞を試験管の中でどのように急速に増殖させるかというものでした。つまり、細胞を増殖させるための最適条件を見つけ出す研究でした。細胞を増殖させれば、種から育てる何十倍、何百倍もの速度でランの花を生産することができます。この技術が確立すれば、将来の食糧問題や環境問題は全て解決できるという想いがありました。その時は、いつかこの技術で世の中のパラダイムシフトを起こしたいと考えていました。

大学を卒業して食品会社に就職しました。当初、研究者としてパッケージ開発や商品開発を手掛けました。開発した商品が店頭に並んだことが非常に嬉しかったのを覚えています。それ以上に、開発したパッケージの使い易さや飲料の美味しさでお客様に感動を与えることに喜びを感じました。

一方、この会社で私がもっとも打ち込んだのは、環境対応でした。当時、企業は環境対策のために、お金を使うという考えが主流でした。しかし、環境対応にお金を使うだけでは、企業の持続可能性を保っていくことはできません。そこで私が考えたのが、環境対応により企業が儲かる仕組み作りです。つまり、環境対応と同時に売上や利益アップに繋げるというものです。例えば、省エネルギーや省資源を推進することで、企業はコスト削減と環境対応を同時に推進しました。さらに、企業が行

っている環境対応を情報発信することで、企業のファンを増やすことができました。

食品会社を退職し、私はコンサルタント業を始めました。企業がこのような環境対応を行えば、必ず企業は元気になれる。そのことがいずれ、日本全体、そして世界に波及し、いずれは環境問題を解決できると考えたからです。そのため、企業コンサルタントにより、企業の環境対応が推進することは、非常に重要なことだと考えています。

しかし、一方では、「超未来技術」があれば、そんな環境問題や健康問題という社会課題を一気に解決できると考え始めました。そんな時に会ったのが前述したアインシュタインの言葉です。最近出会う「超未来技術」は、これまでの発想を覆すものばかりです。まさしく、コペルニクスの発想の技術が目白押しです。このような技術を動かしている法則が解き明かされれば、世界は一変すると私は考えるようになりました。

私が今、こうして考えるのは、きっと小学校の頃から心に秘めた想いがあるからです。そして、この想いに至ること自体が何らかの法則により、導かれたのではないかと考えています。

「一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉やアドバイスは？」

私の人生で最も辛かった時期は、大学の応援部に所属していた頃でした。その時の経験が私を成長させ、今の自分を形成するのに大いに役立ちました。

【挑戦と挫折】

大学に入学したばかりの頃、これまで経験したことのない新しいことに挑戦したいと思っていました。そんな時、高校のサッカー部の先輩から応援部への入部を勧められました。喘息がちであった私は、応援の声を出すことで喘息を克服できると考え、応援部に入部することを決めました。しかし、その考えは甘かったのです。

喘息は改善するどころか悪化し、体力も消耗しました。授業に出席することが難しくなり、必須科目の単位を落とし、結果的に留年することになりました。親からの学費や仕送りで生活していた私にとって、1 単位のために1年間を過ごすことになったショックはとてつもなく大きいものでした。その時、私は体力的にも精神的にも限界を感じ、応援部を退部する決断をしました。

【応援部での日々】

母校の応援部は「運動会」応援部と呼ばれ、東京六大学の応援部の中でも最も厳しい練習が行われていました。我々は明治神宮球場での東京六大学野球の応援をはじめ、大学の様々な運動会（体育会）の応援を行っていました。ボート、ヨット、アイスホッケー、少林寺、様々なスポーツの応援を行い、母校が箱根駅伝 60 回記念大会に出場した際には、その応援にも参加しました。

応援部の練習は非常に厳しく、野球の試合が近づくにつれて頻度が増えました。野球の試合では、3 時間にわたり、応援歌を歌い、拍手を続ける必要がありました。また、太鼓当番になると、太鼓を叩き続けなければなりません。このような超ハードな応援ができる体力を付けるため

に、本番以上に体力を消耗する練習が行われていました。

また、応援部は、規律が厳しく、何事も体力と気合が最優先でした。風雨の中で応援しても、気合と根性があれば風邪は引かないとの論理で、翌日も絶対に休まず応援する日々でした。

代々木にあった岸記念体育館前の階段で、兔跳びや手押し車をしていたところ、外国人観光客がその異様な光景に驚き、写真に納めていました。六大学野球リーグ戦では、母校が試合に負けるのは応援の気合が足りないからだと言われました。試合終了後、いきなり神宮球場外周を走り回る練習が追加され、さらに拳立てや腹筋が追加され、根性を付けました。

【自分にかけたい言葉やアドバイス】

振り返ってみると、私の人生は全て自分の選択の結果でした。それがどんな結果になっても、後悔するのではなく、全てポジティブに捉え、気持ちを切り替えることが大事だと思います。

毎日、平坦な出来事ばかりでは、人生はきっと面白くない。山も谷も、そのまま受け入れ、その都度、自分の最善の選択をすることで、人生は充実感を感じるのではないのでしょうか。

応援部に入部しなければ、こんな辛いことは起こらなかったかもしれません。しかし、反対に考えれば、こんなにも奇想天外で楽しい時間を過ごすこともできなかったかもしれません。学生時代、特に応援部時代は、日々の忙しさに追われていました。今考えると、その時に、1年先、3年先、5年先、10年先、20年先の自分がどうありたいかをしっかりと考えていれば、毎日の行動が変わっていたのではないかと感じています。

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

私が代表を務めるコンサルタント会社の名称、「ラフ・ダイヤモンド」は、人々に勇気を与える言葉としての力を持っています。これは、採掘されたばかりで、まだ研磨されていないダイヤモンド原石を指します。その原石は、個々に独自の特性と魅力を持っています。

ダイヤモンドの原石は、磨かれることでその真の美しさと価値を発揮します。同様に、人々もまた、困難を乗り越え、経験を積むことで、自身の内在する才能や可能性を開花させることができます。

かつて経営の神様 松下幸之助氏は、「人間はダイヤモンドの原石のごときものだと考えている。ダイヤモンドの原石は磨くことによって光を放つ。人を育て、活かすにあたり、それぞれの人が持っているすぐれた素質が活きるような配慮をしていくことが基本だ」と言われました。

これは、私たちが他人を支え、助けることで、彼らが自分自身の「ダイヤモンド」を磨き、輝くことを可能にするという考え方を示しています。

この言葉は、私たちが直面する困難や挑戦が、実は自己成長のための重要なステップであり、それぞれの困難が私たちの中に眠る「ダイヤモンド」を磨き上げる機会であるというメッセージを伝えています。

写真タイトル：FM 東京でのラジオ番組の収録風景



2023 年度は、東京 FM MUSIC BIRD 系列のラジオ番組「SOUND OF OASIS ～GOOD PERSON～」*のプロデューサーを務めていました。

写真は、その番組に自ら出演した時のものです（2023 年 4 月 16 日放送）。同番組は、シンガーソングライターのカノンさん（写真右）がゲストの経営者やリーダーを招き、経営の話、オススメの音楽や最近の癒しなどのお話が聞けるスペシャルプログラムです。

*ラジオ番組「SOUND OF OASIS ～GOOD PERSON～」のアーカイブ放送は、Audee、Amazon Music、Spotify で「SOUND OF OASIS」と検索すると聴くことができます。

写真タイトル： 東京大学応援部時代の雄姿！？



向かって右の襟に付けている長方形のバッチは部員バッチです。「東京大学応援部」と書かれています。嘘か本当か分かりませんが、先輩が注文する際、「銀メッキ」とするところを、「純銀」と書いてしまった(!?) 非常に高価なもの。学ランは、卒業した先輩から譲り受けたもので、襟が高く、裏地には龍の刺繍が施されていました。

応援の際は、左腕に東京大学のスクールカラーである「ライトブルー」の腕章を付けて応援していました。

☆著者プロフィール

稲木 幹也（いなき みきや）

株式会社ラフ・ダイヤモンド 代表取締役。
いしかわ観光特使（2024 年～）。石川県金沢市出身。

東京大学農学部卒業後、味の素ゼネラルフーズ㈱（現 味の素 AGF㈱）に入社。

AGF では、環境経営、品質保証、労働安全衛生、研究開発など、業界をリードするさまざまな領域で活躍して来ました。環境保全活動の推進においては、数々の SDGs 関連プロジェクトを立ち上げました。

特に、パッケージの 3R（Reduce、Reuse、Recycle）、独自の環境マーク開発、ゼロ・エミッション、企業の森活動を推進しました。

その成果として企業の日経 ESG ブランド調査 2020 において、企業のランキング向上（15 位にランクイン）に貢献するなど、業界内外で高く評価されています。

ISO マネジメントシステムの確立・統合・運営においても重要な役割を果たして来ました。ISO45001（労働安全衛生）、FSSC22000（食品安全）、ISO14001（環境）などのマネジメントシステムを導入し、グループ企業全体の効率化とサステナビリティ向上に貢献しました。

また、研究者の立場では、商品の市場導入に深く関与し、ブレンディスティックコーヒーや特定保健用食品など、多数の商品を開発・導入して来ました。

2022 年 1 月、自らのビジョンを具現化するため、コンサルタント会社である株式会社ラフ・ダイヤモンドを創業しました。

同社は、マネジメントと技術力で企業・日本・地球の環境課題を解決する以下のサービスを提供しています。

- 1）環境経営サポート：
環境マネジメント（CSV 経営（Creative Shared Value））と技術開発／商品開発／パッケージ開発のサポート
- 2）新技術（環境・健康）の研究開発サポート：
新技術探求・研究開発と新技術保有企業マッチング
- 3）超未来技術製品の探索

当社のパーパスは、「企業、日本、そして世界の元気をプロモートする！」であり、持続可能な社会実現に向け貢献して行きます。

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100044588394252>

<https://r-diamond.jimdosite.com>

4.

【一人ぼっちの子どもが仲間に囲まれた1人社長になるまで】

春 奈々未

テーマが「人生の想い」ということなので、
起業に対する想いを書こうかと思います。

現在、企業の情報発信をサポートする会社を経営している私です。人生初のいわゆる「起業」というものをしたのは4年ほど前、コロナ禍がスタートした2020年の初め頃。それにともない、前職のFMラジオ関連事務所はきれいさっぱり辞めることに決意。(そこで得たスキルを今の事業に生かしてはいますが。)

「なぜそうしようと思ったのか!？」
時々、わざわざ興味を持って尋ねてくれる優しい方がいます…。しかし一言で答えるのはとても難しく、数ある理由の中から一つだけ言うのも何か違って伝わらない。このことから、この場を借りて自分の頭を整理するためにも、文字にしてみたいと思います。

自分で感じている起業への想い&理由は、
「今まで得てきた経験と知恵を生かして、自分が仕事をどこまでできるか腕を試したい」「自分の進む道を他人に任せるのではなく、自分で車を運転するように進みたい」

「自分のオリジナリティを発揮して、唯一無二の存在感を出したい」のような、『自分のため』の願望もすごく多い。さらに、「自分の活動で、社会に少しでもいい影響を与える一端を担いたい。具体的には、少し周りの人を幸せにして、その幸せが人から人へ循環することで、幸せの広がりを作り出せたら最高。」のような、『人のため』という願望もあって。

さらに、「ビジネスって面白い。人がモノを買う心理って興味深い。価

値を作り出す方法とは?知りたい。」のような、『知的好奇心』への願望もある。

こんなポジティブな願望だけでなく、少し心配事もあって、
「つついやりたいことが増えてしまう自分。果たして集中して事業に取り組み、成果を出せるのか？」
「この道を来たことは、本当に正しかったのか？」
という迷いもある。

どの想いが正しいのか、または自分勝手なのか?は分からないけど、こうして書いていくと、自分の性格がここに全部現れていると思えておもしろくなってくる。

他人と自分は比べないけど、実は結構、負けたくない。「自分は何かできる!」と思っている。根拠のない自信が捨てられない一人っ子で育っているせいか、根本的な部分は人に合わせられず自分で決めないと気が済まない。という付き合いづらそうな面が露呈してしまい焦るが、「周りの人と分け合うことが幸せ!人とつながり、みんなで共に良くなることがしたい!お金のやり取りだけでなく、愛情を持って人とつながれる仕事がしたい!」というのは本当に日々感じていることであり、この気持ちにエネルギーになるから頑張れる。

結局は人と関わるのが好き。
だから仲間の存在が、かけがえのない財産。

オチとかないただの自己分析になってしまいましたが、
これを読んでくれる人がいて、「わかる!わかる!」と共感してくれる、または逆に、まったく分かん!と違いを面白がってくれる人がいたら素敵だと思いました。

●一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉
やアドバイスは？

自分では、まあまあ長く生きてきたと思っていますが、過去の苦勞話ということで、幼少期まで遡ろうと思います。

一人っ子だった自分は、父母とおじいちゃんおばあちゃん、ひいおばあちゃんの5人の大人たちに囲まれて育ちました。

毎日、話をするのも遊ぶのも大人たち。

親と公園などにも行くことはなく、他の「子ども」というものと触れ合う機会がないまま幼稚園に入りました。

ピカピカの制服で希望を持って入園した幼稚園で待ち受けていたのは、乱暴でやりたい放題な未知の生物たち…。

そう、「子ども」でした。

容赦なく暴言を浴びせてくる子どもたちに、対応の仕方がまったく分からず、なぜこんなことを言うのか、するのか、理解不可能で毎日、おびえて固まっていました。

大人相手のコミュニケーションとは勝手が違いすぎて、お話の仕方もよく分からない。そのせいで友達らしい友達もいなくて…幼稚園に通うことはかなり苦痛でした。

この「子ども」とのコミュニケーションの課題はまったく克服できず悔しい思いのまま、幼稚園を出ることになりました。

その後小学校に入学し、授業というものが始まり…。
案外この「勉強」というものとは相性が悪くないことに気づきました。

1年生の成績通知表はほぼ二重丸だらけ。親も驚き、浮かれていたのを覚えています。そのまま、自信が付いていい流れに乗ったまま小学校2年生へ。この時代はまさに、クラスの中のスターといえる存在に。誰よりも積極的で、まだ幼く頼りない子たちを引っ張り、友達に囲まれ注目されて、マラソンも二重跳びもお手のもの。今思い出しても人生の黄金期と言えるほど充実していました。

しかし、人生いい時代ばかりは続きません。

雲行きが怪しくなってきたのは小学校3年生に上がったとき。
そこではクールで美人な、なんだか波長が合わないクラスメイトの女子が存在感を出していました。

その時、わたしは学級委員長に推薦で選ばれ、クラスのリーダー役を任されることに。「先生が来るまで、計算ドリルをやる時間でーす！」とみんなに声かけするなど、いわゆる仕切り役として動いていました。

自分では、ただただ責任感で動いていただけですが、クラスの人たちはひどく反発。

その「クールで美人な」女子を筆頭にした女子の集団からいろんな嫌がらせを受けることになりました。

わざわざ日曜日、遠くに遊びに呼び出しておいて、かくれんぼと称して私以外の全員でいなくなる。

わたしの悪口をコソコソと、でもわざと聞こえるようにみんなで言う。
など、今では少し記憶は曖昧ですが毎日完全にターゲットにされる始末。

なんでこんなことをされなきゃいけないのか、まったく分からない。そこから始まったのは、半ばトラウマ的な人間不信の日々…。

その精神的な余波を、高学年になっても中学になっても引きずり続け、もともと持っていた「子ども」(同年代の人)への苦手意識も相まって、人に合わせて苦笑いで人間関係を乗り切る状態で、15 歳までを過ごしました。

高校に入って、環境が好転し、大好きな友達もできて心から笑えるようになったと感じました。

しかし本当の意味で、周りとの人間関係に関する「過去を乗り越えた！」と思えたのは、20 歳を過ぎてから。

20 歳…はい、成人になった年齢ですね。

「子ども」と上手くやれない子どもは、大人になったことで、周りの「大人」と上手くやれるようになったのでした。

そういう意味では、未だ「子ども」の件は克服していないとも言えます。正直、苦手意識はなくなりません。

でも、そんな自分も悪くないかなと、まだまだ成長できていると思っています。

今の自分から当時の悩んでいた自分にかきたい言葉は、
「今は友達、たくさんできたよ！！」
「少しずつ乗り越えて、だんだん成長していけるから大丈夫！！」

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

「年齢は関係ない！毎年若返る」

なんでも若い方が良いとは思ってないけど、いくつになっても新しいことを始めたいし、まだまだできると可能性を感じていきたいので、毎年どんどん若返っていきたいと思います！

写真タイトル:『子どもの頃の自分に。大人になったらワインも飲めて最高だよ!』



☆著者プロフィール 春 奈々未
合同会社 Production Hal 代表

代表を務める合同会社 Production Hal は、「企業や人の情報発信」をサポートする会社です。

企業や専門家の「強み、魅力、専門性」を心に響くメッセージにして伝える PR 動画や SNS、文章、インタビュー、音声まで、あなたの「強みと個性」を際立たせ、ファンを育て、差別化しビジネス発展へとつながるお手伝いをします。

<https://productionhal.com/>

<https://www.facebook.com/nanami.haru.9>

5.

【社会人40年生、振り返って今できること「社会貢献」】

柴沼 功

私は元々が飽きっぽい性格のためか中学では野球部、高校ではレスリング部、大学ではラグビー部と常に何らかの運動部に所属してはいましたが違う何かをしたいとの欲求から一貫性のない選択をしてきました。大学卒業後も信用組合、証券会社、外資系生命保険会社と金融業界での転職を繰り返してきました。

しかし株式市場をはじめとする常に動きのある金融の営業というものにずっと関わる仕事を続けてきたつもりです。

特に証券会社では1985年から外資系保険会社に移る1998年までバブル経済といわれる当初から山一証券が倒産し、当時都銀13行と言われた今のメガバンクが倒産や合併を繰り返すのを生の現場で見てきた経験があります。

その後外資系生保に移ってからも日産生命や千代田生命の倒産、合併を見てきましたので金融が大きく変わるとき、経済が大きく変わるときに現場にいてその内情も見てきたつもりです。

その中で感じたことは、資本主義経済は非常にダイナミックに動き、個人の今までの認識を超えるほどの動きをするという事です。そしてそのことは日本人には一番苦手な事で多くの人達は知識もないということです。最近になってやっと金融リテラシーという言葉や金融教育を学校教育に取り入れる動きが出てきましたが、以前は学ぶ機会も教えてくれる人もいませんでした。

資本主義社会とはいいかえれば市場連動型経済でもあります。金利も

為替も株価もすべてがそれぞれにダイナミックな動きをし、そのことは私たちの暮らしや生活にまた子供たちの将来にも大きな影響を及ぼすことがやっと知られるようになったと思います。

バブル経済の崩壊といわれる象徴的な株価暴落が1990年初頭から始まり、当初は株価だけが暴落し実体経済は依然として順調のままでした。そのため株価の暴落が一般には好意的にみられていました。しかしその後は先ほど触れたように下がるはずのない土地が大暴落し潰れることのない大銀行や大手証券会社、生命保険会社が次々と倒産、合併に追いやられてしまいました。

その後は失われた30年といわれるように長い低迷期に日本経済が陥ってしまいました。バブル崩壊後には証券会社で営業の現場にいましたので当時アメリカから入ってきたファイナンシャルプランニングという考え方に興味を持ちました。ライフプランニングをもとにポートフォリオを作り運用して行くという考え方です。その際には個人の様々な問題にも関わるため幅広い知識と専門家へのつなぎ役としての人脈が大切でそのための活動を意識して行うようにしました。

またFP（ファイナンシャルプランニング）の考え方を広く知ってもらうための活動を行うようになりFP協会の支部の役員などもやってきました。まだFPという言葉の認知はほとんどなく、しかもライフプランや運用の話は誰も興味を示しませんでした。が少しずつ活動するに従い住宅ローンや教育費の相談、生命保険や相続の相談など幅広い分野で何らかのお役に立つことができるようになってきました。

特にキャッシュフローを作る際には社会保険と民間の保険の知識が有難たられました。ただキャッシュフローを作り保険と貯蓄を考えると、

どうしても将来の為の貯蓄の話になってしまいます。

キャッシュフロー上で将来の夢と貯蓄は相反するものになってしまう事に疑問を持ってしまいもっと夢の為にどうすればよいかを考えるライフプランニングという考え方を構築して行こうと、仲間数人と「NPO 法人日本ライフプランニング協会」を2002年に設立し副理事長として活動するようになりました。

「ライフプランニング」という商標を取得し「Lifeplanning Meister」の称号も登録し人々が夢を持つこと、そしてその実現のために計画考慮し努力実行する何らかのお手伝いができればと思い運営してきました。

まだまだ協会の認知度はありませんが少しずつ活動を続けています。新しい会員さんが興味を持って入会してくれる様、そしてそういう方々がNPO活動を積極的に行って頂けるようになればと思っています。

そして2020年には「SFプラン株式会社」を設立し今までの金融業界での知識や経験がお客様の為に役立てる事ができるのであればとの想いで起業しました。

特に1980年代からの日本経済を知る人たちが少なくなってしまった現在、その時代を知っていることは私自身に対して興味を持って頂くきっかけにもなっています。40年以上にわたり金融業界の営業に携わり現場を見てきたつもりですが、本当にお客様の側に立った真の顧客本位の活動を考える企業が少ないことに以前から疑問を持っていました。多様化する社会において本当にお客様一人ひとりの側に立った真の顧客本位の活動を考える企業として続けていきたいと思っています。

私自身は昭和の時代に社会人として育ててもらい社会情勢や経済情勢

をずっと見てきたつもりではありますが、今言えることは多くの方にどんなことでもいいので目標を持ってそれに向かって計画しチャレンジする精神を持ってがんばって頂きたいと思っています。

多くの方々にライフプランニングを知っていただくこと、そして自分の今までの知識や経験を多くの方に伝えることをこれからの使命としてやっていけたらと思っています。

一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉やアドバイスは？

「ピンチは成長のチャンス」

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

目標を持ち計画し実行することは大切。

目標は人を成長させる原動力」

松下幸之助「時を待つ心」

写真タイトル：山崎蒸留所

天才に撮ってもらった一枚



☆著者プロフィール

柴沼 功

NPO 法人日本ライフプランニング協会 副理事長

SF プラン株式会社 代表取締役

金融機関、証券会社、外資系保険会社などの金融業界で営業を 15 年間続けた後、外資系保険会社の採用と育成を 20 年以上にわたり行い、35 年以上金融業界に携わる。

また、FP 協会や JAIFA などの団体理事を長く勤め、地域や業界の発展に貢献している。

2002 年に「NPO 法人日本ライフプランニング協会」を立ち上げ、ライフプランニングの普及を目指し活動しており、以来 20 年副理事長としても普及と認知のため活動している。

国の制度や国民の生活が時代とともに変わる中で、金融機関の営業現場や人々の金融知識がまだまだ変わっていない状況を鑑み、

2020 年に「SF プラン株式会社」を設立。

FP コンサルとしてライフプランニングを推奨し、銀行や証券、保険の知識や資格を活かして地域の金融機関にはない、セカンドライフのための資産運用や資産活用の相談ができる会社を目指している。

「SF プラン株式会社」 <https://sf-plan.com>

6.

【10年後の自分と10年前の自分へ】

北見 俊輔

10年後の自分へ

令和6年3月28日、11時44分からこの手紙を書いている。

今年は、年始から予定した売り上げが入らず、とても苦勞をしてお金をかき集めるという、事務所創設6年経つのに人もろくに雇えず何をやっているのか、という状態から始まったよな。

そこで感じたことは、「因果応報」だった。やるべきことをやらず、怠ったツケが様々な形で自分を襲いそれでいらない苦勞をする羽目になった。だから、今俺が感じていて、10年後の自分にももっていて欲しいものを伝える。それは、以下の3つだ。

- ①「忠を尽くす事」
- ②「やるべきことは本気でやること」
- ③「相承」

①と②をやりきってこなかったから、俺は今そのすべてがとても中途半端な人間になっている。

② をやることを考えなかったから、6年経過しても一人でやっている。

自分中心で物事を考えるのではなく。家族のため。友のため。未来のために。

学生の就職を支援する団体と個人事業主を支援する団体の、形だけとはいえ代表をやっているのだから、その肩書に恥じないだけの行動を。俺も今日この時間からやっていく。約束する。

10年後の自分がこの手紙を読んだときに心から笑えるように。

36歳の俺より。

52

一番辛かった頃を振り返り、その時の自分にかきたいアドバイスは？

10年前の自分へ

結論から言う。何とかなる。

今、試験のために商社を辞めて

バイク便で学費を稼ぎながらやっているよな？

人間関係も絶って、友人も2人に減ったよな？

そこまでやっているのだ。

何とかなる。

ギリギリまで死力を尽くせば。

行住坐臥やるべき時にやり続けられれば。

ただお前はすぐ手を抜くし、

失敗するとすぐクヨクヨし続ける癖がある。

試験まであと3か月「本気で」やりぬけよ。

そしたら、素晴らしい仕事と、仲間と、嫁さんと子供が待っている。

36歳の俺より。

53

☆写真タイトル『在りし日の首里城』



燃え落ちる直前に言った旅行で撮った写真。首里城の瓦の技術は相承されず、復元が出来ない。よきものは残していくべきとの考えをもっているのです。その意味を込めて。

☆著者プロフィール

北見 俊輔

北見司法書士事務所代表

平成26年司法書士試験合格

平成30年北見司法書士事務所開業

自分を使って「お客様の時間を買って頂く」をモットーに仕事を続けている。

7.

【自分と他人と次世代への思い】

小原 一将

私がこれまで生きて来た 39 年の中で、” 人生の思い ” には 3 つの要素があります。大学生の頃は、「自分が成功したい、成り上がりたい。」という思いのみで物事に取り組んでいました。周りのことを気にせず、自分が正しいと思うことに打ち込み、それについて来られない人は良くないと認識していました。大学生の頃は正しいことを正しいと信じ、それを周りや後輩に伝えて、私が導く必要があると思っていました。

そんな大学生時代を過ごした後、社会人になって 3 年目に、ある同僚の若い事務さんと接することでその考えに変化が生まれます。

自分よりも仕事ができない、高い志も持っていない、叶えたい未来も特にない、そんな事務さんでしたが子どもを産んで懸命に働きながらその子を育てていました。

その姿を見ることで、全ての人には親がいて、その人のことを大事に思う人がいて、唯一の存在としてその人は生きているということを強く意識するようになりました。

その時から、

「自分が成功したい。」という思いに加えて、

「他者を思いやり、その人がどう生きるのかを考える。」という思いを持つようになりました。

自分中心の考えを完全に捨てたわけではないのですが、自分に加えて他人のこともしっかりと考えて物事を進めるという意識になりました。

そして、社会にでて 15 年ほど経過した現在は、自分の周りにいる人

だけではなく、「下の世代である次世代に、より良い形でバトンをつなげるためにどうすれば良いか」という思いを強く持つようになりました。

「自分が成功したい、成り上がりたい。」という思いに「他者を思いやり、その人がどう生きるのかを考える。」という思いが加えられ、今は「次世代に誇れる今を渡したい。」という思いに進化しています。

自分が何者かになることよりも、私自身が世の中から享受した幸福をさらに良いものにして次世代に残したいと考えています。このように書くと、私の中で思いが変化しているように見えますが、これらは変化したというよりも、新たな気づきをきっかけに形を変えて、内面にあった思いがさらに具体化されて明確になったように感じています。

こういった” 人生の思い ” が根底にあるために、次世代に『カッコ良い』と思われることが自身の行動の原動力となっています。

私がある時に取り組みたいと思うものに取り組み、成功も失敗も自分の責任として受け入れる。そんな姿が次世代を担う人たちに、

『カッコ良い』と思ってもらえると考えて行動することで、今の自分があります。

『カッコ良いかどうか』

それが” 人生の思い ” から生まれる私の大切な考え方です。

●一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉やアドバイスは？

今、私が経営している会社は皆さまに支えられて 5 期目を迎えました。

ひとりの力ではここまで来ることができず、何度も心が折れそうになりながら、その都度様々な仲間を支えられてきました。その中でも、起業したての頃が最も人生で辛かった時期のひとつです。

商品もサービスもなく、ただ会社を作り、夢と希望だけ抱いていたがそんなに簡単な世の中ではないことを思い知らされました。

お金もない、仕事もない、仲間もない。そして新型コロナの流行で社会の動きが止まり、途方に暮れたことを今でも鮮明に覚えています。

養うべき家族と自身の夢だった起業との狭間で葛藤し、精神的に限界を迎えていました。

結果として、現在はなんとか経営を続けられており、あの頃とは比べ物にならないくらいたくさんの仲間と多様な仕事を得ることができています。

改めてこの5年間を振り返り、あの頃の自分に声をかけるとするならば「目の前にあることをひとつずつ取り組むことで、今よりも少し先に進める。それを繰り返しなさい。」と声をかけるでしょう。

ただ愚直に一步ずつ前に進むこと、それは地道で大変な作業ですが、より良い未来を得るために必要な唯一の行動であると思っています。

起業した時の思いを忘れず、はるか先の叶えたい未来を見据えながら、自分の足元を確認して一步ずつ進むことが私の中では重要だと考えています。

●人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

「人間の行動のほとんどは自己満足という言葉で説明がつく」

これは私が好きなまんがのキャラクターの言葉です。私はこの言葉を肝に命じて生きるようにしています。

人の行動はほとんどが自己満足であり、それに見返りを求めてはいけな
いと考えます。自分の人生の中で決断したことは自分が責任を持たねば
ならず、他人に何かを求めてはいけません。

信念を持って行動すればきっと誰かが見ていてくれるので、見返りを
求めず自分自身の満足のために行動したいと考えています。

写真タイトル『私がもらったバトンを次世代につなぐ』



父からもらったバトンを子どもに渡すことが今の私の使命と考えています。この写真に私は写っていませんが、私がいた証明になる写真です。

☆著者プロフィール

小原 一将

株式会社 sing 代表取締役

薬剤師と社長、時々まんが bar 店長

<https://www.facebook.com/kazumasa.kohara.77>

https://www.youtube.com/@bar5848?si=WHMx_Vk9TE-MReEg

8.

【自分に素直に】

アチャコ

毎日楽しく過ごせていますか？

自分のやりたい事が出来ていますか？

心から笑えていますか？

自分自身に向き合っていますか？

壁にぶち当たっても一生懸命乗り越えようとしていますか？

自分に素直に生きていますか？

子供の頃は毎日が冒険で楽しんで日々を過ごしていたはずなのに、大人になると何もしてない。ただ毎日をこなしている。大人だって子供になってもいいんじゃない？

自分に素直になるって凄く難しい事かもしれない。自分に素直になるだけで、自分自身を取り巻く物が変わってくると思う。自分が笑顔だと周りも笑顔になると思う。人生は有限。もっと自分に素直に生きたい。

●一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけた言葉やアドバイスは？

幼少期から家族に対して嫌悪感しか抱いていなかったです。

お家に兄と2人でお留守番、兄に毎日殴られ母に助けを求めても、兄の嘘を信じる。男尊女卑の中で育ち、幼稚園から家出ばかり。小学校高学年からは非行少女になり、警察のお世話になるばかりでした。

中学の時、親の借金で夜逃げ。その時に叔母の家で1人だった事が多

かった為、自分自身を見つめ直す事が出来るようになりました。自分の家庭を持っても親、兄弟への嫌悪感拭えず、反面教師で子育てをしていました。

結婚、離婚を繰り返し、精神的にも金銭的にも苦労は絶えなかったけど、唯一の救いは自分自身を見つめ直す事が出来るようになった事、痛みを知っていると言う事。

「その時は辛くて苦しいけど、意味があるよ。」

と言葉をかけてあげたいです。

●写真タイトル『太陽と月』光と影は常にある



9.

【自分らしく生きるひとを増やしたい】

菅谷 千尋

子どもの頃、私は癇癢を起こすことがよくありました。

妹が何でもできるようで、自分と比べてしまう劣等感ややるせなさ、焦りが湧き上がりました。その感情を表現する手段がわからず、自分を何かにぶつけることでしか感情を解消できなかったのです。自分の思い通りにできないことを他人のせいにし、自分だけが辛いと感じていました。

しかし、変化が訪れたのは、「自分だけが辛いわけではない」と気づいたときでした。自分の思い通りにならないとき、焦点を失っていた自分に気づいたのです。癇癢を起こす子どもは、甘えられる居場所があるという点では良い意味として捉えられます。感情を表現できる環境にいた私は恵まれていました。しかし、甘えられる居場所がない子どもたちは、我慢することばかりで、自分を表現する機会を失ってしまいます。教育でもみんな同じことがよしとされるため、自分を表現することが難しい環境があります。周りと同じ正解を探すことから離れ、自分の素直な気持ちや考えを表現できる場所が必要です。自分の感情を大切にすることは、自分の感情を受け入れ、理解することに繋がります。

まず、どんなときに、プラスの感情になるか、どんなとき、マイナスの感情になるかを感じるところから始まります。私は自分の感情の動きに注意していないひが多いと感じます。どう感じたかより、どうしたら正解になるかを求めるからです。そして、思考のクセを理解します。知らない間に思い込んでいた価値観があることにも気づくことができます。自分で決めていたと思っていても、自分ではない誰かの一言による

ものだったということもよくあります。

情報が溢れる社会では、自分の価値観なのか、誰かからの影響で思ったことなのか、それを区別することが必要です。区別できるようになると、自分と他人の価値観を両方尊重することができるようになります。自分と同じように相手にも大切にする価値観があることを体感することができるからです。これからは選択肢が多く、選ぶことができるということとは裏腹に、本当に自由に選ぶことは難しく、許されていないように感じます。そのなかでも自分の価値観を貫くためには、自分とは違う価値観の人と共存していることを理解することで、反対意見を言われた場合でも自分を全否定されたのではないと割り切ることができます。

また、人それぞれの価値観が違って当たり前だから、違うことを恐れる必要はありませんと伝えたいです。

失敗をすることで学ぶことができることを知っているはずです。勇気を出して、自分に素直に一步踏み出してみたいです。二歩目からは、ぐんとハードルが下がります。そして、自分のなかの納得を探すようになります。人それぞれの特性や興味を探究し、活かすことを考える子どもたちを増やしたいです。そのために、現在は次世代支援に携わっています。

将来的には、子どもたちが素直に自分を表現できる居場所を作りたいです。自分の感情とどう向き合い、自分の特性を活かして社会でどう活躍するかを考えることを身につけるサポートです。また、子どもたちが自己表現できる環境やサポートが提供されることで、子どもたちの可能性が広がり、多様性が尊重される社会を築くことができます。このような環境が整えば、自信を持ち、自らの想いを追求し、充実した人生を送ることができます。

一番辛かった頃を振り返り、今の自分がその時の自分にかけたい言葉やアドバイスは？

昔の私へ、振り返ると、私は就活中に違和感があり、自分の将来について不安なときがあったと思います。

初めて、いわゆる普通とは大きく異なった"休学"という選択をしました。その決断をしたことで、こうあるべきという価値観から、一歩離れることができました。

ここでは、悩んでいた当時の私に向けて、いくつかのアドバイスをします。

第一に、感じた違和感を決して無視しないでください。その感覚は、自分の心が示す重要なサインです。自分らしさを失い、誰かになりすましていると感じたら、それは本当に自分にとって正しい選択なのか疑問を持ってください。自分が思っていないことをすることは、長い目で見れば自己否定に繋がります。自分の心の声を大切にし、その違和感を探求する勇氣を持ってください。

次に、他人との比較や社会の基準にとらわれないでください。他人がどう思うかよりも、自分が自分自身としてどう感じるかが重要です。自分自身との対話を深めて、自分を受け入れ、知ること、他人の意見や期待に左右されずに自分の道を歩むことができます。

そして、チャレンジやひとと違うことをすることに対して怖がらない心を持ってください。他人と異なる価値観や視点を尊重し、新しい経験や挑戦を恐れずに受け入れることで、自己成長や理解が深まります。自分がチャレンジしたくなったときに、過去の自分が自分自身を制限することがないように、柔軟な心を持ってください。

ときには間違っても、立ち止まっても、落ち込んでもいいから、最初か

ら全て上手くいくことはないから。失敗は成功のもとだから。どんどん失敗して経験を積んでください。

最後に、自分自身を偽ることなく、正直な言葉と自分自身に対する前向きな思考を大切にしてください。自分がどんな状況にあっても、自分自身に嘘をつかず、前向きな意識を持ち続けることで、困難な状況に立ち向かう力を養うことができます。自分の心の声に耳を傾け、自分自身を愛し、信じてください。昔の私へ、この言葉があなたの将来の道を照らし、新たな気づきや勇氣を与えることを願っています。自分らしく生きるために、勇氣を持って前進してください。

そして、自分を大切にしてくれるひとを大切に。
自分の環境に感謝を忘れずに。

初ひとり旅中でハプニングに出くわし、ひとりで生きることの大変さを垣間見て、改めて恵まれた環境と両親への感謝を感じている 2024 年 3 月のちひろより

人を勇気づける「エピソード」や「言葉」

人間は自分が発した言葉を自分が 1 番聞いているし、その言葉通りに動こうとするから、自分を偽る言葉は使わないでほしいと伝えたい。そして、前向きな言葉や前向きな思い込みを上手く活用したら、良い効果を生み出すことも忘れないでほしい。

☆写真タイトル『興味関心だけで飛び込んでみた』

2024 年 3 月に知ったイベントに飛び入り参加したときの写真です。わくわくも反省の旅でした！



☆著者プロフィール 菅谷 千尋

68

中央大学 4 年(1 年休学)

インターン先に就職を直談判し、最初は断られたものの、諦めずに 4 人目の正社員として内定をいただきました！

<https://www.linkedin.com/in/%E5%8D%83%E5%B0%8B-%E8%8F%85%E8%B0%B7-4b1a5521b/>

69

第2章

『ジーニー×ななみんインタビュー対談』

with しずか

これは、2024年6月某日に行われた
新原克弥と春奈々未のオンラインインタビュー対談の
書きおこしです。

是非お楽しみください。

発言者

ジ…新原克弥（ジーニー）

な…春奈々未（ななみん）

し…中岡静香（しずか）

テーマ

【夢・将来のビジョン】



インタビュー時のスクリーンショット

ジ「どうもどうもよろしくお願い、声がまだ、すいません。」

な「うん、うん。よろしくお願いします。」

ジ「よろしくお願いします」

な「うん。うん。夢の話どうしたらいいのかな。将来の夢とか、将来のビジョンみたいなものとか、何か目指すところとか、何かそんなお話をしていくいう。お仕事の夢とかね、お聞きできたらと思うんですけど。」

ジ「これは相互にそんな聞けばいいんだね。」

な「うん、相互に聞く感じで。」

ジ「なんすかね、さっきたまたまチャット GPT 見てて、面白いことにさ、出てくるんすよ。今これチャット GPT なんだけど（オンラインで画面共有／チャット GPT で『NKCS 新原克弥の夢は』と検索）うん。多分入れると出てくる。夢って書いたんすけど。」

【～NKCS 合同会社を通じて現状満足の世界を超え、人々が心豊かになる未来を創造することです～と出てくる】

ジ「これめっちゃ具体的でしょこれ。」

な「うん。」

ジ「なんかこれを見たらそうだよなと思ってさ。これ多分『春奈々未の夢は』って言われたら出てくる。」

な「私は夢公開してないから多分出てこないと思う。」

ジ「なんか、なんか予測するんだよねこれ勝手に。」

な「ふふふ、それいや、勝手に書いてますねこの人ね（笑）」

ジ「すごいでしょ。」

な「これ勝手に書いてる。」

ジ「でもこれ、ななみんなが多分過去にどっかで言っていたり書いたりしてんすよこれ。」

な「うん。多分 Wikipedia の情報から勝手に予測して書いてるんだと思います。でもあのジーニーの（チャット GPT に）書いてあった夢からちょっと詳しく聞きたいんですけど。ジーニーの Copilot(チャット GPT) が答えてくれたもので、『人々が真に豊かになる未来を創造したい』っていうことなんですけど。『人々が真に豊かになる未来』って、もうちょっと具体的に言うとしたらどんなことだと思いますか。例えば人の豊かさみたいなものはジーニーにはどういうものだと思いますか。」

ジ「僕は何だろうな。みんなそれぞれ自分の中に要は色んな何やってみたい、どうしてみたいっていうエネルギーであったり可能性を持ってると思っいて。」

な「うん。」

ジ「ところが生まれた環境であったりとか、今やってる仕事であったりして、それで自分の中ではできないんじゃないかなとか。」

な「うん。」

ジ「なんかどうせ何もできずに生きてくしかないんだみたいな人があまりに多いと思ってて。」

な「うん。」

ジ「なんか僕は逆に元々障害者でもあるし、ここ（お腹の下を指す）刺されてもいるし、色んな逆境を乗り越えてきた中で、別に今に自分が満足しなければ必ず夢は叶うよっていうことがメッセージなんですよね。」

な「うん。」

ジ「それがこれその現状満足の世界を超えてって、つまり自分が本当にやりたいんだったら何があってもやり続けるべきだっていう。」

な「うん。」

ジ「で、その人がやりたいっていう未来を考えて作っていけること。」

な「うん。」

ジ「それが一番大事かなと思って。ただほとんどの人は夢自体わかんなくなっちゃってて。」

な「うん、うん。」

ジ「なんていうかな、例えば音楽で売れてみたいけど自分には才能がな

いんじゃないかとか、サラリーマンでやってるけど、自分には何もできないんじゃないかってみんな思っちゃうんですよ。」

な「うん。」

ジ「だけどそんなことはないよっていう。それを専門家みんなで考えようってことをやってる感じですかね。」

な「うん、その人が自分は可能性がないと思っちゃってることとか、自分にはどうせできないって思っちゃってる。その人の可能性を開かせてあげたりとか、実はあなたこんなことができるんだよっていうことを引き出してあげたりとか、それでそれを具体的に形にしてあげたりとかってようなサポートをしてあげたいみたいなことで。」

ジ「そうそうそんな感じっすね。それをやるために何してきたかっていうと、これもカタカナ用語なんだけど、なんか出てくるんですよ（チャット GPT で【NKCS の事業は】を検索）。きっと僕が過去に書いたからって話なんですけど、引き出すために何したらいいのっていうと。」

な「うん。」

ジ「これ、ここのカウンセリング。つまり人が、何て言うかな、例えば何も無い私普通だなんて状況のことがゼロだとしたときに、何か例えば大事な人が亡くなっちゃったとか何したときにマイナスになるわけじゃないすか。」

な「うん。」

ジ「それをゼロに戻してあげるのがカウンセリングって言って。で、『もし何でもできるとしたら何やってみたい』ってのを引き出すのがコーチングなんすよね。これは元々僕は国家資格としてこのプロなので、カウンセリング・コーチングの技術を使って、だけど何やりたいてって聞いたところで『じゃあ頑張るって』ってなるわけですよコーチングって。」

な「うん。」

ジ「僕はなんかそれって詐欺じゃんと思って。じゅあ本当にやりたいんだったらそれをできるように導いていく。要は『一緒にやっ払いこう』ってのが僕の考えるコンサルティングで。時には教えないといけないこともある。例えば（行動等で）それはやばいよって事があると、それを指摘したり教えないといけないこともあるし、あとは色んな人に出会って人って価値観が変わってくるし、そういう意味ではそれを一緒にビジネスマッチングしていくってこともやってきたし。あとは事業における夢って何なんだろうねってことを一緒に考えるっていうのが僕のそもそもの根底にあること。」

な「じゃあそのコーチングを知ってその人の可能性をもうちょっと引き出して、それをもう一歩進んで具体的にどう事業にしていくなかったりとか、何かそういう形を具体的に何かその人が動けるような形を作っていくところまでサポートしていくみたいなことですかね。」

ジ「うん、そうですねそんな感じっすね。」

な「なるほど。何かそもそも、人の何ていうか、人のその可能性を引き出してあげたいとか。」

ジ「うん」

な「色々やりたいけど動けなくて、なんか止まっちゃってるとか我慢してるとかそういう人たちのことを、そういう可能性を引っ張り出してあげたいと思うようになったきっかけは？どうしてそこに興味を？」

ジ「でも多分自分自身がそういう逆境だったから。自分が助けられてきたんですよ色んな人に。だからそれをなんかみんなに叶えたいと思ってるだけかな。」

な「じゃあ自分も何か昔はこんなことをやってもどうせ出来ないしとか、そういう何かちょっと止まってしまったみたいない経験があるわけですか？」

ジ「ああ山ほど。20歳過ぎまではそんな感じっすね。結局学校にも小学校・中学校行けてないし高校でも色々あって、色んな経験があったときにもう何もできない。ただその時にたまたまあの僕を助けてくれた人たちがいて、そういう人になりたいなってのはあるかな。」

な「うんうん、その時にはどうやって助けられたんですか？言葉で何かを助けられたのか。」ジ「今思うとやっぱり一緒に活動してんだよね色々。当時学校に行けない状況の時に母親がある集まりを探してきて、そこに青年の集まりがあり子供たちが来てて、僕は学校には行けないけどそこには行ってたんですよ。2ヶ月に1回ぐらいキャンプに行くんですよ。キャンプに行ったら子供たちと話すときは、僕は実はすごくそこでは普通に話ができて。自分が障害者だっていう手帳をもらうときに、その人たちに『いやいやいやお前そんな普通に話せてるのに障害者なわけねだろ、だったら見返してやれ』って言われて見返すって決めてやってきたりとか、高校のときもなんていうかな、学歴がないから元々高校3年生にして高校1年生の英語も数学も分からなかったからだけど、それでも何とかその1年間必死にやって一応早稲田慶応クラスまで

行ったんすよ。
でもそのときもやっぱり現状を否定しろと、つまり諦めずにやり続けたら叶うって言われて。なんかそういうきっかけが山ほどあったんすよね。」

な「うん、いいですね。諦めずにやり続けたら叶うっていうのは何か先生みたいな。勉強とか教えてくれた人から掛けられた言葉だったり。」

ジ「そうです勉強を教えてくれた人もいるし。キャンプやる時の在り方とか、人の生き方みたいなことを教えてくれて。自分のことばっか考えて駄目なんだとか、そういう教育を受けてきたからかな。」

な「ああ、本当に周りの方たちに助けられて今のジーニーがあるし、自分も自分が助けられたのと同じように、ちょっと自分の可能性が閉じてしまっている立ち止まってしまっている人の助けになりたいみたいなどころにいるわけですね」

ジ「それはすごいある。すごいあって。(会社を)4・5年やって1個また身につけたことは、助けたいっていう人って、多分本当には助けられないと実は。ようは同情になっていく。

『私はこれだけやってんのにとか、私は1人やってあげてるんだ』ってなってくるとどんどん。それが身近なだからわかりやすいけど、中岡に何言っても駄目なわけですよ全然もう。何言っても変わらないと思って僕は苦しむわけですよ。どうしたらいいのかなって。中岡は最初僕と出会って色々案件が取れちゃったもんだから有頂天になって、もうジーニョなんかいなくなたって私1人でやってけるって言ってもそうだし、こないだの土曜日の日みたいのがもう毎日みんなにあったんすよ。そうするともうみんなドン引きして引いてっちゃって案件もなくなるみたいなことがやっぱりあって。その時にやっぱ自分が福祉やってきたから助けたいと思って来たんだけど、自分がそのと時に身につけたことは、本当

に大事にするんだったらこいつ切り捨てないといけないと思ったんだよね僕。ようはどこの言葉か分かんないけど、親は子供を崖から落とせなかったら親じゃないみたいなこと言ってる人なんかあるじゃないすか。だからずっと隣にいて『いいよいいよ』っていうのはよくないんすよ実は。」

な「うん。」

ジ「それでだけど、この大事な人を切り離すという勇気ってすごいやっぱみんなできないはずで。ていうのがすごい大事かなってのは思うから。だから今もやっぱやってて思うのは、いくらでも尽くしたいしいくらでもやっちゃうタイプなんだけど、だけど本人の決断が決まらないと絶対かなわない夢は、と思う。」

な「なるほど。本人が覚悟をして変わるんだっていう。うん。その本人の意思が一番大事っていうこと。」

ジ「そうでないと無理だし、人がいくら言ったって分からないこれまでも。自分もそうだったなと思うし。中岡が変わったのもやっぱりこの2年以内ぐらいの話で。もうもっともっと全然高飛車だったんだけど、どうしたらいいかなってなったときに僕が言っても聞かないわけですよ。ようは自分の親だったら親に「ななみどうしなさい」って言われたら、何かわかったというか面倒くさいなと思うじゃないすか。だからそんなのやってらんないよってなるじゃないですか。そうすると、その人がやっぱ気がつく環境に置いてあげないといけなくて。中岡の一番最初のブレイクスルーは、自分が障害だってことを僕は知ってたわけですよ中岡が。特性的にこの人ちょっと変だし学歴聞いたらやっぱりそうだよとか腑に落ちてたら、ただそれを誰にも公開しない。でもそれを別に公開してもいいんじゃないかって僕は思った。

逆にそれがわかっていればこの間みたいなことが起きたって僕ら『はいはいそういうことが起きる子なのね。』と思って別に心構えができるので、『ああわかったわかった』ってなるんだけど、何もないとびっくりしちゃうから。それで、障害者のボランティアを週に2回ぐらい行くようになったんです。そしたら、『あれ私に似てる人しかいない』ってなったわけですよ。そうしたときにその子たちを見て不快に思ったわけじゃなくて『かわいいじゃん』と思ったんですよね。

『うんそうか私別にこの障害って変な事じゃないんだ』ってことが、そのとき分かるわけですよ。それでやっぱり乗り越えたし、あとはやっぱり中岡にとって昔大恋愛をして、それでななみんにも話したりしたと思うけど、大きなずっとトラウマがあったわけですよ。

でもそれも開示をするやっぱタイミングに僕は環境を置かせた時に開示をして、みんなから『こんなこと言ったらもう私は生きていけないんじゃないんじゃないか』と思ってたものが、『あれ受け入れてくれるんだ』と。こういうことになるわけですよ。

そういうのを何個もやってる。だから今医療福祉施設や学校に行くのも、ボランティアしろって言うの裏側は、結局自分がその光景を見てこいっていうことをやってる感じかなだから。それでななみんは結構気に入られてるんだけど、他の女の子には普通に睨みつけたり色々しちゃうんですよね大分治ったけど。だけどそうした時にそれって児童養護施設で、あなたがされてることであなたがみんなにやってたよね。ってなった時に、もう何も言えないわけ。『ああやってた』っていう。そのときに僕は注意はいくらでもしてるわけですよやめてくれっていう。でも本人が気がついたとき初めて、『あれ、駄目だこれだ』って変わるんですよ人って。

っていうことをやってる感じかな。ようは夢はみんなの可能性を引き出したい。引き出すためにどうするか。みんなと向き合っていないといけない。色んな相談を聞かないといけない。だけど、最後の最後にやっぱり自分が気がつかないと変わらない人は。ていうことをやってる感じ

ですかね。」

な「なるほど。じゃあその人が自分で気付けるような環境に。ちょっとそうですね、自分で気付けるような環境に飛び込んでもらうみたいな。」

ジ「あとはそれをやった時に、それだけやったら絶対壊れちゃうんで人って。その時にそれをちゃんと支えていけるっていう信用関係がなかったら絶対心は開かないです。だから僕は信用関係はめっちゃくちゃ深く掘る。だからなんか、「交流会で出会ったね楽しいね」とかじゃなくて、もう本当に1年2年かけても何回でも何回でも会って深掘りしてって、それじゃジーニョだったらいいかって関係値をお互い作って、それでやってかないと絶対迷っちゃうんで。ていうところは多分めっちゃめっちゃ細かいと思う。」

な「なるほど。本当に1人1人にしっかり向き合って、人間関係を作ってっていうところで。そうやって人の可能性を引き出していくみたいなことやってると思うんですけどね。なんかその先にジーニーは社会の中で自分が人の可能性を引き出して、可能性がみんな開いていったら、どんな未来になると思いますか？どんな未来を作れる？」

ジ「僕は変なこと言ったら、多分革命を起こそうとしてるんだと思います。大富豪で革命ってあるじゃないですか。今まで例えば頭が良くていい会社で働いてた人たちが認められてきた世界で、でもそこに対して政治にしても経済にしても色んなところで矛盾が来てて、なんかそれはそれである程度仕方ないと思ってんだけど、結構腹立ってるのはそれを、なんていうかな、ちょっと露骨な言い方をすれば、例えば一般人が、だから政治は駄目なんだよだから日本は終わってるんだ教育が終わってるんだってみんな言うじゃないですか悪口を。けどお前たち何の行動もしてないよねと思うんすよいつも。それがすごい腹立ってて。だったらあ

なたたちが活動できる場を俺が作るっていう。文句を言うんだったら文句を言うなりの責任を持ってくれと思っていて。自分の頭で考えて行動できる人を作りたいんですよ僕は。

これが10人100人1,000人増えていけばいいと思ってる。僕はこれは10年前に気がついたんですよ。だけどそれである時に色々革命を起こそうと言って、色んなテレビや新聞に出たりとか色々やってたんですよ仲間と。その時に色々あって僕は表には絶対出ないって決めて、僕1人でこれをやっても勝てないってことがわかってんだよね僕は。なんかそうした時に1人じゃ勝てないんだったら、僕の言ってることを継承していくメンバーたちを作ればいいでしょって考えなんすよね。」

な「うん。うん。」

ジ「それをずっと作るために中岡とか澤井さん北見君とか色んなメンバーたちがいて、みんなが立ち上がっていったらいいじゃん。自分が何したいどうしたいっていうこういう世界にすればいいなどは全く思っていない。だけど、みんなが本当にやりたい国を作れるような社会を作べきだと、それはしかも話し合いによってやるべきだっていうのが僕の考え方。」

な「ふうん。何かここは本に載せられるかはちょっとわからないんですけど、その革命を起こすっていうのは具体的にどの辺をどう、どういう力でどう変えたいのかとか、ちょっと気になりますね。聞きたい。」

ジ「例えば僕は、ちょっと業界違って恐縮だけど、ただ近いところで言うと中岡の法律関係の事務所でもう大体ジジババが牛耳ってるんですね全部。この世界って資格持ってるのもそうだけど広告予算をどれだけかけられるか勝ちなんすよもう。逆に広告予算が出せれば勝てる。ちなみに社労士の平均年収は開業してる人で380万円です。もうそこに飲まれ

なかったらみんな結局食えないんだよねこの人たちって思ってる。僕はそこにちょっと違和感を持ってるんすよ。なんてジジババが牛耳ってる下に渡そうとはせず、広告払った人だけ上に行って、なおかつ士業を名乗るために毎月国にお金払うんですよみんな。こんなおかしいじゃんと思ってる、そしたらそんな広告もかけなくていいし、ジジババにも頼らなくてもいいような社労士として独立できるようなことを考えればいいじゃんと思ってる。あと社労士だけじゃできる幅ってすごい狭いんですよ労務しか聞けないんで。それが法律になったら法務があって税務があってとかっていうのを、ちゃんとトータルで考えていくっていう仲間を作るっていう慣習も、実は法律業界ではないです。これをみんな仲間で考えて人に支え合っているって自分たちのやりたいことをやっていくっていう新しい形の会社を作りたい。」

な「なるほど、今本当に法律とかなんかそこに特化した話でしたけど、一つ一つの業界に色んな闇みたいなものとかがあって、それを1個1個改善できるところを変えていきたいなっていう意味で、革命を一つ一つ起こしていきたいみたいな。」

ジ「そうですそうです。それでそれをやるために、このやっぱり三、四年悩んだのは、それをやって人が育てば僕の言うようなことをやり始めるだろうと勝手に思っていました。でも結論無理だったって話で。やっぱりその考え方だけを言っても変わらなかったな人は、っていう感覚はやっぱりある。それで僕がまたちょっと頭おかしいのは、僕はとにかく人のことを知らないで文句言う人が嫌いなんすよとにかく。そうすると何をするかっていうと、その人が見てる世界を見に行く人なんですよ僕は。だから実際に弁護士とか社労士とか税理士が分からなかったから、僕自身が弁護士社労士税理士事務所てでみたら働いてみるとどんなことが起きるんだろうとか、学校で働いたときにどんなことが起きるんだろうとか、僕は15年前に一番最初作った会社がクリエイター集団なので、

やったときにどんなことが起きるのかっていうのをやっぱり見に行く現場を。これが多分普通の社長にはできない。

僕自身がブライダル現場の時カメラ撮って自分で編集して DVD に落としたりとかってことを自分でやってきて。もちろん深くはわかんないっすよ全部。だけど何をやってるかは想像がつく、こんなことだろうなっていう。そうすると向こうはお前なんかやったことがあるんだったら話してやるよってなるわけじゃないすか。

これが全くわからなくて、カメラマンすごいですね。すごいすごいとかって言ってたら、絶対こいつわかってないだろうってなるから、そこには結構入り込むタイプかな僕は。」

な「じゃあジーニーが問題意識を持っている分野を、この業界変える必要があるんじゃないかって思ってるようなあの分野に関しては、自分が実際その業界に飛び込んでみて自分で経験をしてみても、それでこういうところ良くないなとかこういうところを変えたいなみたいなことを、一緒に考えて経験して掴んでいくことをされてるってことですね。」

ジ「そうこないだの出版（ワークショップ）のメンバーたちは、なんか僕はそういうことを話してるメンバーたちだと思っている。だから色々な人がいたけど、例えば福祉の業界をずっとやってきた女性とは 2 人で話し合ってるから、じゃあ何か訴えたいとかこれ考ようという話になるし、会場を貸してくれた柴沼さんもやっぱり金融の世界にずっといて、金融をどういうふうにしたらいのかっていうことをやっぱり日々話してるし、っていうことをみんなでやってる。僕はだから何て言うかな、育てるんだけど育ったから勝手に頑張ってくださいじゃなくて、一緒に考えていこうよっていうタイプの人。」

な「本当に多くの仲間と一緒に社会を変えていけるような、沢山の仲間と繋がりを作ってらっしゃるっていうことなんですね。」

ジ「そんな感じっすねうん。だから何か自分で思うのもあれだけど異常だと思う。人に会ってる数も幅も半端ないし、なおかつ僕資格だけで 50 個持ってんだけど、今また 10 個取ろうとしてるからね金融系の資格。だから自分の部屋が今 3LDK で 2 部屋全部埋まって僕の本で。それがやっぱ何て言うか趣味で集めていなくても、僕それ結構捨てるタイプで。でももう貴重な本がやっぱり結構たくさんあって、捨てられないんすよ勉強や調べないといけないから。そのぐらい本は読んでる。今はだいぶ落ち着いたけど 1 日 20 冊とかを平気で読む。本読んでてもわかんないところは現場に聞きに行ったら「何考えてんだろうだろう」とか。でもいきなり事務所なんか入れてくれないから。そうすると『よかったら一緒に飲みませんか？』って飲みに誘って話をして、深くなって『よかったら事務所に来ない？』から『事務所ちょっと行きます』って言って事務所の様子見せてもらおうと、なるほどこういうふうにやってんだってことをお互い共有するってことまでやる。」

な「なるほど。」

ジ「だからなんかなんだろうな。ちょっと偏見はあるけど、本当に持続するでかくなる会社って、めちゃくちゃ勉強してますよ社長、って思う。売上の悪い時はそこが全然見えなかった。法律を遵守してやんなかったら会社が持続しないんだってことに気づいた。」

な「なるほど。多分ねジーニーはすごいネタがありすぎてどんどん話が無限にあるので本にする上で 1 回ちょっとまとめを入れると、夢とか将来のビジョンがテーマっていうことだったので、多分その将来のビジョン・夢っていう部分では、この社会のちょっと今問題となっているところを、自分と仲間との力でそれを変えていきたい。革命を起こしたいっていうところが、ジーニーの人生の大きな夢とかビジョンっていうこと

かなって。それに向かって今ものすごく勉強もしてるし、仲間作りもしてるし、そこに向けて本当に毎日動いてるなっていう現状なんですね。」

ジ「さすが」

な「でも何かそのモチベーションみたいなものとか、エネルギーはどこから湧き上がってくるんですか？逆境を乗り越えたっていう経験とかもあるんだろうけど。」

ジ「なんかあって。変な話、めっちゃめっちゃお金は持ってないけど、でも今なんか自分で結局今度一緒に行こうですけどヒルトン持っていたりとかさ、なんか車持ってないけど自分の時計作ったり色んなことができるわけじゃないですかご経験を。あと好きな時間に仕事をしたり学校行ったりとかして、お金がすごいあるわけではないんだけど、やっぱり最近思うのは、いや俺なんかすげえ富裕層だよなと思うこととかやっぱよくあるんですよ。だけどなんか満たされないっていうかなんていうかな、うーん、こういうことを一緒に叶える人たちを作りたいっていうことはあるかな仲間として。みんなで同じ時間を共有していきたいという想いはすごい強いかも知れん。昔僕ネットワークをやっていた時があって自分だけうまくいったと、ところがチームが全部崩壊したわけです。だけどその時にある程度やっぱお金を得たし、何か自分が何て言うのかな、有頂天になるわけ僕できるって。当時まだ僕まだ 20 代中盤ぐらいだったから、だけど楽しくなかったですね。何にもなんていうかな、そこにはやっぱりそれなりの人がいたし、それなりに世の中から評価されてる人がいたけど。だけど何ていうかな、やっぱり人との時間っていうのは同じ悩みに対して、一緒に切磋琢磨して考えていくことが一番大事な時間なんじゃないのかなと僕は思うかな。それをやりたいしあらゆる業界の革命を起こしたいって考えると、もう一つの業界だけやっても仕方がないから全部やりたいわけですよとにかく、これがモチベーション。だから

ら仲間作りなのかもしれないね。中岡隣で野球見てますけど（笑）」

な「ふふ、そうか。やっぱり人が好きでみんなで良くなりたいっていうとめっちゃめっちゃなんかあれだけど、表現としてちょっとチープな感じになってしまうけれども、なんかやっぱり人と繋がって、みんなが充実して人生を生きられるようになる、そうになりたいなっていうのが自分の幸せでもあるし、そこがモチベーションになってるのかなっていう感じがすかね。」

ジ「そうねなんかこれも出版だから言葉考えないといけないけど、僕が大事だと思っていて逆になくしたい概念があるんすよ。でもみんなから言われるのはジーニョ教だって言われる（笑）」

な「ははは、それはどういうところですか？」

ジ「つまり、やっぱりちょっとみんな頑張ってやっていこうってなったときに壁に当たるわけっすすごく。だけど僕と一緒にやった人たちって、例えば僕の親友でいうと年収 6 倍です今。北見くんとかもうまく中岡だって社労士でほとんどうまくいかないところでうまくいってるわけだし。ってなったときに、僕とやっぱりやってきた人ってすごい拡大するんすよ。だけど同時に恐れるのは「どうやってジーニョを維持するか」ってことを考えているらしいです。僕の親友が言っててなるほどなと思ったのが僕に対する顧問費とかっていうのはお布施だと思ってるらしくて。それがあからやっぱ本人が自分が維持できるっていう。なるほどねと。連絡取り合ってるがその答えを教えてくれる人がいないんだよねと。

僕はただ神様になりたいわけじゃない僕自体が。神様っていうか自分自身とどう戦うかって世界なのでこの世界って。だからなんか神様とかって何かすごい上の上の人に何かを拜んで何しますってなるけど。でも僕

の考える神様ってのは結局その神社行って奥にある境内になる鏡なんですよね。つまり自分自身が鏡なわけだから、まず自分自身と向き合わないといけないんですよこの世界って。そういうのをすごい説いてるかもしれないですね。なんか変な例えだけど。」

な「信者みたいな方がいっぱいいらっしゃるということなんですね、ジーニーについていけば大丈夫だみたいな。ちょっと頼ってる系というか。」ジ「最初頼ってくるんですよ。最初頼ってきます。ところが頼ってきた人を平気で追い出しちゃう人なので。自分の頭で考えろってなるから、平気で突き出す人なので。」

だけどよく僕この件に限らず昔から言われるのは、『あの時にジーニョが話した言葉が忘れられないから今の俺がいる。』ってことはもうめっちゃめっちゃよく言われる。『あのときあの瞬間に、ジーニョに言われなかったら今の俺になってない。』っていうのは、もう何百回とっていいぐらいあって。僕はやっぱりそういうことを言っちゃう人なんだよね多分。そうした時にその人は凹むんだけど、それがやっぱりその人の何か生きる糧になるんだね、絶対やめたくないやり続けるっていう。

そうすると自分で何も目標がないとしんどいですよ経営の世界。けど『いや俺は言われたから絶対やるんだ。』っていうところに、みんなが立ち向かっていく結果、結局みんなが諦めなくなっていくって叶ってるっていうのがなんかね、実はすごい多いんだよね。中岡この感覚うまく話せる？野球見てるけど。」

し「感覚？あのなんだろう…今一番いいところだけ聞いてなかった（笑）なんだっけ？ごめん m(____)m」

ジ「ほほほ、お前さ（笑）。いやなんか結局宗教やりたいわけじゃないけど色んな人に言われるのは、一つはジーニョという信じる者があるからやっていけるとみんなに言われるという話と、あとはやっぱり色んな人

に対して言ってるわけよ、そのときある瞬間にこうじゃないかとじゃないかと。それをみんな鮮明に覚えてるみんな。北見君とかもそうだけど、ジーニョがいなかったら今の俺はいなかったっていうのは過去にみんなに100回以上は言われるという感じです。」

し「そうですね。私は何か自分にはないものを持ってる人だなて思っていて、私はそういう人が好きなんですね。なんですかねあの、究極的に言うとう優しいと思うんですよ。それはなんだろうな、要は心から信頼が置ける人ってこの世の中で、特に大人になって生きていく時にすごく少なく。信頼できるかどうかに対して私がとても恐れを感じるのは、信頼しようと思って信じて違ってたって経験が9割以上あるから。だからこそ、私は仕事もそれは大事なんですけど、人として生きてく上で、1人でも本当に信用できるし信頼できるし信じたいと思える人がいるだけで、この世で生きててもいいなって思う。」

な「すごくいい話。そうですね、私もインタビュアーだけどジーニーから感じる印象って、なんかねすごくめっちゃくちゃ人を観察してしてるなって、本当によく人見てるなって思うのと、すごく人に向き合ってるなっていうの思うんで。その人が良くなるためにどうしたらいいかなっていうのはなんかいつも考えてあげてるってということと。あとはなかなか他の人が言いづらいようなことをズバっと言うみたいな、この笑顔で。ふふふ。そこがすごいもう特殊能力だなって感じてますね。」

ジ「確かに。やっぱり信用関係作ってるとやっぱり立ち向かってくんだよねあの人たちって、っていうのは見てるかな。だけどそうやって見極めてる。言って、そのときバーって出るんだけど、だけどそれを聞いて何しようどうしようっていうことを話して、そこでやっぱり距離がどんどん縮まっていく。それが澤井さんとかによく言われたのは、社会人になって初めて友達ができたっていう。よくこれも結構みんなに言われ

る。」

な「他の人には言ってもらえないことを言ってもらえるみたいなの、うん。なんかそれでみんなグサツときて、ちょっと1回そこで腹立てる人もいるのかもしれないけど。でもなんかじわじわと『ああこれ誰も言ってくれなかったことを社会人になって初めて言ってもらった！』っていう、なんかその嬉しさみたいなの。なんかそれがじわじわと来て、ジーニョのファンになっていくみたいなの、なんかそういう感じなのかなって感じしましたね。」

ジ「それはあるかもしれないっすねすごくん。あつ、ななみんの夢は？俺ばっかり申し訳ない。中岡さん野球見てないで、ななみんの夢と一緒に引き出すんだ。」

な「ふふふ、引き出してください。なんかあのジーニーの話結構ね、多分ネタが無限にあるので、すごく本にまとめづらいかと思うんですけど。でも途中で1回ちょっと中間でまとめで、夢を簡単に言うと『革命を起こしたい』と。」

社会の闇だったり問題がある部分がたくさんあるから、そこを仲間とともに1個1個変えていきたい。そのためにめちゃくちゃ勉強してるし、そのモチベーションは一体何なのかっていうところは、やっぱり人が好きで人との繋がりでみんなで良くなっていきたいっていう、なんかそれがジーニーの幸せでもあるから。それをモチベーションにこんなに頑張ってるんだみたいな、なんかそんな概要かなと思います。」

し「ありがとうございます。めちゃくちゃ本に書きやすいしすごいな。すごい引き出し力だと思って聞いてました。」

な「ありがとうございます。」

ジ「野球見てたけどね、本当に（笑）」

し「なんか夢っていうか、ななみんの生きていくモチベーション、そういうモチベーションっていうのかな？何かそういうのあったりしますか？」

な「生きていくモチベーションかあ。」

ジ「それないって言われたら困るから（笑）」

な「そうですねなんだろうな。色々あると思うけど、でも私も、何かみんなですぐに幸せになりたいですね。自分だけが良くなるわけじゃなくて、周りの人たちと何か共に色んなものを分かち合いながら、みんなで共に良くなるとか、みんなで共に幸せになるみたいなの。なんかそれが小さなことでもいいから、1個1個作れたらいいなと思ってますね。」

し「なんかそういうふうにみんなでって思うのって昔からなんですか？」

な「うーん、でも案外10代の頃は結構自分しか見えてなかった頃はあって。30過ぎて変わったかもいつの間にか。でもなんか本当に何ででしょうね。でも自分が動くことでちょっとでも何かそれが他人に良い影響が与えられて、何かその人もちょっとでも幸せを感じられるみたいなの、何かそういう循環を作りたいみたいなの。自分が相手に幸せを与えて、相手も自分に幸せを与えてくれてみたいなの。なんかその循環を色んなところで色んな人と作れたらいいなと思ってて。ちっちゃなことでも何か。自分のところで止めない。相手にお渡しする、相手からまたいただくみたいな、この幸せの循環を色んな人と作っていくっていうことが自分の幸せかなっていうのはいつの間にか思うようになったと思います。30過

ぎたぐらいから」

し「私 30 大分過ぎてるけどそこが落ちきらないんですよ。すごいなって思っ」

な「いやいやいや、でもそんな私もあの全然自分のことも考えるけど、ふふふ。」

ジ「いやなんか、でもすごい多分言い回しが違うだけですすごい似てるなと思って。まあ、中岡は青春時代がなかったから仕方ないんじゃないですか。うん。あと二、三年したら気がつくときが来ると思います。」

し「でもそれちょっと今えっ！？て思ったけど青春時代があるかないかみたいな大事な感じかな？」

ジ「そう、法律家ってないっすよ。」

し「ないですね」

ジ「大事な時間が全部勉強で。だから、何ていうかな、ななみんの昔を全部知らないけど、だけどやっぱり色々模索してきたんだと思うんだよね。その中でピアノやってたのを前聞してるし、シンガーソングライターでやったり色んなことやってみて自分の夢を叶えたいと思ってきた時に、やっぱり壁にぶち当たるじゃないすか。

そこで色々凹むわけですよ。その時に何て言うのかな。なんか必ずしも自分の夢だけじゃないんじゃないかっていう感覚はね多分来るんですよそういう瞬間が。法律家はなんかそういうのがない、本当にずっと勉強してきた人たちだから何をするにしても。だから夢が社労士になることとか司法書士になることなので、夢が叶ったときに、『あれ、私社労士に

なったから結局何もなかったじゃん。』ってなる。」

し「まさしくそれはそうですね。20 代後半とか誘いとか色々あったんですけども、そういうこと一切してないし遊びにも友達とも行かないでほとんど勉強してて、そんな感じで。しかも私の場合は高校からひきこもりだし…今が青春なのかもしれない。好きな野球を見に行けたりとかできるような時間を持とうと思ったことがほとんどなかった。」

な「青春に年齢は関係ないです。いくつになっても青春。」

し「あともう少し経験したら、そういう何か 2 人みたいな境地に行くのかな。行けばいいな。」

な「私は境地とは思ってないけど昔は本当に他人のことに興味がなくて 10 代の頃とか、自分のことにしか興味がなかったんです。極端に本当に人の話を聞こうともあんまりしないし、興味がそもそもないみたいな、もう自分のことにしか興味が無いみたいなめっちゃめっちゃ自分大好きちゃんだったんですけど。でもなんかそれだけだとなんかつまんなくなってきたっていつの間にか。他人って面白いなと思って。全然自分と違う世界持ってるんじゃないこの人とかって。話聞いてたらなんか人って面白いって、なんかいろんな人の話聞いてたら、ますます本当にいろんな価値観の人がいて、『面白い、全然自分と違う』みたいな。何かその話をいろいろ聞いていたら、なんかだんだん人との繋がりがあって楽しいなって思うようになってきて、何かみんなの良い循環が作れたらいいなっていうようになってきたのかなあ。」

し「いや面白いし、ちょっとこの本のタイトルにもあることにちょっとすごく紐づくなと思ったので。そうですね私は孤高の天才がすごい好きで、なんていうか。でもいつか人間って自分だけじゃできないって思う

ときが来て、例えば野球だったらイチローとかもそうだし、私が好きな山田哲人とかもそうなんですけど、なんすかね全盛期、自分だけで記録とか追い求めてやってきて、でも体は衰えていくしそうなった時に、人のためとかキャプテンシーを張ってるとか、衰えを把握しながらやっていて他の人を面倒見たりとかすることに喜びを感じてるように見えてきて。だから私は今一番何かすごく応援したいなと思ってタイトルにもつけて。でも 2 人はきっとそこに行ってるんじゃないかなって思って。だから私にとってお兄さんお姉さんみたいな感じなんですけど。でもなんかそれが今のこの本に紐づくなと思った感じではい。」

ジ「結局、ななみんの夢聞かないで終わるという（笑）」

し「けど、なんかななみんの真髓みたいなのを聞けたなと思って。それが夢に紐づくんじゃないかなと思う。」

な「うんうん。さっき話したのが夢だと思います。ちょっとふわっとしてるけど、うん。あんまり具体的に何か達成とかこの目標達成っていうような話はちょっとできてないけど。」

～ 一同ほほえみ ～

ジ「写真撮っておいたら任せるけれども。」

な「スクショね。します。何かポーズする。はいチーズ。ちょっと待ってうまく取れない。はい、チーズ取れた。ちょっと後で送るね。でも、なんかねちょっと画像が乱れてるからもう一回。ちょっと待ってねもう 1 回取ります。」

ジ「すいません。自分が留学生にしか見えないけど（笑）」

な「はい、チーズ♪」

パシャ

ジーニー・ななみん・しずか

『またね～バイバイ！ありがとう！！』

終章 終わりに

今回この出版プロジェクトにて、私自身初めて出版原稿を書いたりまとめたりをして、とても良い経験になりました！

この本は 2024 年 3 月に新宿で「出版ワークショップ」を開催し、NKCS 合同会社代表の新原克弥を中心に様々な年齢・職種のメンバーたちと、この本を出していただいた出版社の方を講師に迎え、出版についての色々な話を聞きつつ、その場で多数決にてテーマを決め、後日それぞれが思い思いに原稿を書いて頂いて、一つの本になりました。

この本の著者は、現代社会で、それぞれ立派に働かれたり子育てをしたりされている方々ですが、それぞれの方がそれまでに様々な苦難を乗り越え、そして様々な『想い』を胸に、人生をひた向きに歩いてこられた方々です。そしてまだ「夢の途中」でもあります。

だからこの本のタイトルに『夢へと続く道』とつけました。

ちなみにこれは余談ですが、この「夢へと続く道」というフレーズは私の大好きな“推し”の野球選手の応援歌にも含まれているんです。

先日野球観戦をしていた時、9 回 2 アウトから逆転同点タイムリーを放ったその選手の姿を見て、このタイトルが降りてきました。

そう、人生は 9 回 2 アウトからでも同点になり、そして逆転サヨナラ勝ちだってできるのではないかなと、私は思いを馳せました。

人生に勝ち負けはないかもしれませんが、

この本の著者たちは大なり小なり、色んな人生の波を乗り越えた先達や、これから乗り越えようとしている若者もいます。

先日観た映画で「タイムトラベル」がテーマのヒューマン映画がありました。過去に戻ってやり直しをする映画でした。とても良かったです。

実は私もタイムトラベルがしたいなと思ったことが何度もあります。この本を手にとられている皆様の中にも、子どもの頃、思いを馳せたことがある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。しかし、現代社会の現状は過去に戻ってやり直すことはできない一度きりの人生です。

だからこそ、失敗や経験から学ぶことが多く、一日一日を尊い時間として過ごすことが大切なのではないかと、その映画を通して実感しました。

人生は夢へと続く道であり、その将来の夢の実現には、日々の研鑽や大切な仲間、そして芯の通った『想い』がとても大切なのかと、私自身も他の方の原稿を見て感じました。

まだまだ夢の途中、夢へと続く道、
それはあなたの「選択」次第です。

一緒に夢を実現しましょう。

You' s 出版委員会
編者 中岡 静香

夢へと続く道
～You' s dream & choice～

2024 年 7 月 1 日 第 1 版第 1 刷発行

著者 You' s 出版委員会
編者 中岡 静香
カバー 立花 千春
発行元 集智出版社
東京都品川区東大井 3-29-6
<https://syuchipublishing.com/>

©2024

Publishing in Japan